
目指せ！死神！BLEACH異端編

バージル兄さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指せ！死神！BLEACH異端編

【Nコード】

N6338M

【作者名】

バージル兄さん

【あらすじ】

何となーく生きていた主人公は行き成り死にます。そして、死神に出会います。その出会いから新たな物語が紡がれる

そんな面倒臭いストーリーじゃありません。
あ、鈍亀更新です
御不快に思われる方は迷わずBACKを

青年、死亡編 新たな出会い（前書き）

ハイ。突発的に書いてみました。

理由はアニメと漫画の碎蜂を見て惚れたからです。

後、勝手気ままに書いていくので、独自設定等がかなり出ると思います

作者は原作を持っていませんから、ゆるーく流して下さい

青年、死亡編 新たな出会い

皆さんは散歩なぞされますか？

俺は良くします。

夜に歩くと空気が澄んでいて気持ち良いんですよ

さて、その日もいつも通りに夜の散歩をしていた時です

「おお、こんな所に広場があるとは！」

散歩していると、偶に今まで見えなかった物も見えて面白いんです

おや？

「見間違いないじゃ無いようですね」

何か黒っぽいというかデカイ

何で仮面なんか被っているんでしょう？

それにしても、デカイ

3〜4mはあるだろう

「お前、俺が見えるのか？」

バツチリと

何なんでしょう？

「会話できるなら教えてくれや。お前さんはなんだい？」

「俺は虚^{ホロウ}という^{ホロウ}虚？」

初めて聞きましたね

「お前を殺す者だ！」

そう言つて、飛び掛かってきました

なに、その展開！？

「お前の魂を食えば、俺はさらに強くなれる」

幽霊^{ホロウ}って魂が食い物なんですか？

現実逃避から帰ってきました

現在、超追われています
しかも、段々後ろの声が『食わせる』から『クワセロオッ！』になってきました

今日は厄日に違いない

「ニゲルナアア」

逃げるに決まっているでしょう

うわぁっ！今、掠ったっ！絶対、掠った

しかし、死の恐怖ってこういう物なんです、お母様
先立つ不孝をお許し下さい

ザクッグチャ

グロい音と共に俺の腹になにかが突き刺さる

自分の血なんて見たくなかったよお

うわぁ、背中から貫通してる

余り痛みを感じないのは、何故でしょう？

そして、後ろからの悲鳴

え？

悲鳴？

振り向こうとしたら、出来ずに無様に転がってしまいました
背中から腹に貫通してるのに後ろに向ける訳がない

「もう大丈夫だぞ。お前を苦しみから解放してやろう」
誰ですか？

転んでいるので見上げることしか出来ない

見上げると、そこには

とても綺麗（俺主観）な人がいた

「あ、有難うございます。お名前は？」

会って、3秒で名前聞くなって

ナンパ野郎じゃあるまいし
相当テンパっているらしいです

「・・・・・・・・・・・・・・・・碎蜂だ」
え？

自己嫌悪に陥っていて、聞いてませんでした
もう一度お願いします

「・・・・・・・・・・碎蜂だ」

碎蜂さんですか

良い名前ですねえ

そろそろ意識が無くなって来たので、お先に失礼します
お休みなさい

side out

碎蜂side

私はその日、本当に偶々そこを通りかかったただけだ
決して夜一様を探していた訳では無い！

「助けて〜〜っ！！」

一人の男が虚^{ホロウ}に追われていた

その男は何故かとても軽々と攻撃を避けていた

「確か、あの虚^{ホロウ}は手配書に・・・・・・・・」

あつ。そんなことよりも助けなくては

急いで、空を蹴りソイツの元に駆け寄る

ソイツは何故か此方に視線を向けて固まり、そして、攻撃を受け倒れた

おかしな奴だ

本当におかしな奴だ

「死神イイイ。お前もクワセロオオ」
ふざけるな

「雑魚が」

一瞬で斬り伏せて、ソイツに駆け寄る

「大丈夫か。今、苦しみから解放してやるっ」

ソウルソサイティに送って

何故か驚いたように大きく眼を見張り、口を開く

「あ、有難うございます。名前は？」

以外に余裕があるんだな

しかし、何故名前なぞ知りたがるんだ？

「私の名前は碎蜂だ」

ちゃんと聞いているのか？

此方に視線が向いていないのだが

「だから、碎蜂だ」

今度は聞こえたらしく、嬉しそうに頬が綻んだ

そして、眼を閉じた

もうそろそろ霊体が出てくるだろう

そうしたら、もう少し話してみてもいいかもしれな

青年、死亡編 新たな出会い（後書き）

こんなの書く暇あったら、バカ天？書こうぜ、俺。

青年、会話編　んで、送られる（前書き）

さあ、次は夜一さん登場編

夜一さん s i d e で頑張りましょうか

青年、会話編　んで、送られる

「で、お前の名前はなんだ？」

おや、先程の美人さん

確か、碎蜂さん

さて、俺は死んだ筈ですが

ふと、見下ろすと俺の身体が血まみれで倒れていました

「俺、幽霊？」

しかし、随分とグロい死に方ですね

碎蜂さんの方を向くと、軽く頷かれました

「何とまあ」

「で、名前はなんだ？」

ああ、そういえば名乗っていませんでしたね

「西東さいとう 杏里あんりといいます」

「杏里か。宜しく頼む」

笑うとさらに可愛いですねえ

そういえば、死んだのに何故碎蜂さんは見えるんでしょう？

普通は幽霊なんて見えませんよねえ

質問してみると

彼女は死神だそうです

・・・・・・・俺、これから刈られるんですか？

「そういえば、杏里は何故ホロウ虚が見えるのだ？」

何故と言われても

「何故かあの時はバツチリと見えましたが」

俺は20何年生きてきて初めて初めて幽霊なんて見ましたからね

まあ、見た途端に殺されたので余り関係ないですね
で、それがどうかしましたか

行き成り何か呟きました

あの一。放置ですか
そうですか

「杏里。これから、私の上司に会ってもらう。とても素晴らしい人
だから、きつとお前のことも考えて下さるだろう」

碎蜂さんの上司さん？
素晴らしい人らしいです
優しい人だといいますが

「開錠」

虚空に碎蜂さんが刀を刺すと扉が現れました
死神って超能力まで使えるんですねえ
何か今日一日、吃驚体験ばかりです

扉を潜る前に礼をしたら、不思議な物を見る目で見られました

青年、会話編？ 猫さん喋るんですねえ（前書き）

浦原さんって、こういう喋り方でいいんですかね？
最近、百合ッ子って聞かなくなりましたね。

青年、会話編？ 猫さん喋るんですね

儂がそ奴を見たときは、面白そうに周りを眺めておる時じゃった
ここ、尸魂界に普通の人間が来れる筈がない
儂は酷く興味を引かれた

「おや？猫、ですねえ？」

近付いていたら、直ぐに気付きおった
・・・・・・・・・・・・・・・・詰まん

「捨て猫って訳でも無いでしょうし、野良っぽくありませんね」
当たり前じゃろう

「良いとこの猫なんでしょうねえ」
「当然じゃ」

「・・・・・・・・・・驚いた。化け猫ですか・・・・・・・・」
失礼な奴じゃ

しかし、驚いたと言っておきながら無表情とは本当に詰まん奴じゃ
もう少し驚いても良かろうに
それに

「儂は化け猫では無いわ」

「それでは、猫さん。お名前は？」
フザケタ奴じゃ

「夜一じゃ。覚えておけ」

「夜一さんですね。俺の名前は杏里です」
杏里か、中々面白そうな奴ではないか
礼儀もしっかりしておるようじゃし

パンツ！

む？

「おや、碎蜂さん。上司さんには会えましたか？」
ほう？随分と嬉しそうに笑うではないか

「いや、それが何処に・・・・・・・・・・」
どうした碎蜂？

「夜一様！」

ぬお！？

ええい、行き成り抱きつくでない

「ああ、夜一様。このような所にいるとは」
話を聞けえええええ

「おや？碎蜂さんの上司は夜一さんなんですか？」

「あ、杏里！貴様、無礼は働かなかっただろうな！？」
離さぬか！

「多分、大丈夫だと思いますがねえ。それより、猫さん。苦しそうですよ」

だから、猫と言うな！

「はっ！私としたことが」

「ゴホン。杏里、儂と碎蜂でチト話があるから」

「ああ、分かりました。そこいらを散歩してきます」

side out

杏里 side

「いやあ、最近は猫まで喋るんですね」

何故か碎蜂さんに外に出るなと言われたので、そこいらを歩いてい

ます。

何か、面白い物はありませんかねえ

「おや？アナタ誰です？」

お？誰です

「誰と言われても、暇人とても答えますか」

実際、暇ですし

「随分と変わった人デスねえ」

そうですか？

そういえば、この人も死神なんでしょうねえ

何か十二つて書いた羽織着てますけど

偉い人なんでしょうか？

「それで、アナタ誰です？」

んー

「名前は西東 杏里です。アナタは？」

「杏里サンですかあ。あたしは浦原 喜助です」

浦原さん？喜助さん？どっちで呼びましょうか

「じゃあ、喜助さんで」

「本当に変わった人デスねえ」

褒められているんでしょうか？

「喜助さんは何をしに来たんですか？」

「ああ、アタシも暇潰しに来たんデスよ」

仲間ですなえ

「それじゃあ、杏里サン。一杯どうデス？」

はい？お酒ですか？

「いいですよ。そんなに強くないですけど」

「いいんですよ。時間さえ潰れたら」

「それなら」

『『乾杯』』

いやあ、ここのお酒美味しいですねえ

「杏里サンはどうして隊舎にいるんデス？」

「碎蜂さんに連れてこられました」

面白いからいいんですけど

「おや？珍しいデスね」

そうなんですか？

「彼女が男に興味を持つなんて」

おや？

「碎蜂さんは百合ツ子なんですか？」

「百合ツ子って、まあ。そうデスね」

『杏里！それに浦原っ！』

吃驚しました

「どうしたんですか？碎蜂さん」

「そうデスよ」

「夜一様がお呼びだ」

わかりました

「コレ、どうしましょう？」

散乱した酒器類

「後でいいんじゃないデスカ？」

そうですね

「それでは、行きますか」

「そうデスね」

青年、会話編？ 猫さん喋るんですねえ（後書き）

次からは、修行？編に入ります

青年、会話編？ 入りたかった 修行編（前書き）

入れませんでした

青年、会話編？ 入りたかった 修行編

「ああ。杏里に喜助、よく来た」

呼ばれて行ってみると、見たことのない褐色美人に名前を呼ばれました

誰です？

「碎蜂さん。夜一さんは何処です？」

あの黒猫は何処ですか？

豪快な音がしたので、正面を見ると褐色美人さんがコケていました
痛そうですねえ

「杏里。何を言っているんだ？夜一様なら、そこに居られるだろう？」

そう言つて碎蜂さんはコケてる褐色美人さんを指さしました

え？

「本当ですか？喜助さん？」

「本当デスよ。あれが、夜一サンです」
信じられません

いや、さっきまで酒を飲んでいたんですから、幻聴の類でしょう
そうに違いない

「本当に夜一さんですか？」
確認の為に聞いてみましょう

あ、普通に頷かれました

やっぱり

「化け猫なんじゃ「違うわっ！」……………だって、猫から人間に化けたんでしょう？」

台詞を遮られました

「こちらの姿が、儂の本当の姿じゃ」

そこまで言うなら、そうなんでしょうね
しかし、

「呼ばれた理由を聞いてもいいですか？」

「お主が邪魔をするからじゃろうが」

溜息をつかれました

お疲れのようです

「まあよいわ。お主の処遇が決まったので話しておこうと思つての」
俺の処遇？

普通に転生なり、するんじゃないんですか

記憶を無くしたりして

「ようは杏里サンの霊圧が高いんで、死神にしようって話デスか？」
死神って、そんなに簡単になれるものなんですか？

「で、どうするのだ。杏里？」

んー

どうしようか

というか

「拒否した場合は？」

どうなるんですか

「貴様、夜一様の提案を蹴るというのか！ー！」
碎蜂さん？刃物は危ないですよ？

「うわぁっ！？今、絶対カスりましたよ！？」

盲信しすぎでしょう

流石に

「ちょ、ちょっと！（ヒュン）話し（ザン）を聞いて（ザシュ）下
さい」

マジで、怖いですよお

刃物はダメ 絶対

「夜一サン？先ずは総隊長に話しを？」

「うむ。総隊長に話したら、意外に乗り気での。直ぐにでも会いた
いと」

「へえ。それは凄いデスね」

呑気に話してないで、助けて下さいよ！

俺、そろそろ泣きますよ？

「くっ！何故、当たらんのだ」

本当に殺す気ですか！？

「そろそろ、止めにしませんか？」

え？

止めない？

そうですか

「碎蜂さん！」

なら、

「杏里、大人しく斬られる気になったか」

絶対、拒否です

「百合ッ子って、本当ですか？」

因みに作者は、百合は認めますが、薔薇は認めません

何か電波が入りましたが

「貴様、そんな訳があるか!!」

「今回も、本当だといいですね

と、いうことは

「俺が、口説いてもいいんですね?」

あれ?俺って、こんなキャラでしたっけ?

やっぱり、酔ってるんでしょうかねえ

「え?あ、その え?」

おお、混乱してますね

非常に可愛らしい

「杏里、碎蜂を口説くのはそれ位にしてこちらの話を聞くのじゃ
わかりました

非常に不満ですが、大人しく従いましょう

「口説っ!何を言ってるんですか、夜一様!?」

「杏里サンは、碎蜂サンのこと好きなんデスカ?」

「喜助さん。見てわかりませんか?」

「まあ、なんとなく脈ありっぽいですけど」

それは、嬉しいですねえ

「ええい、面倒臭い。杏里、付いて来い!」
はいはい

逆らっても、碌なことが無いでしょうし

青年、会話編？ 入りたかった 修行編（後書き）

次は、総隊長sideからです

青年、修行編？ 髭、何を置いても髭（前書き）

タイトルは余り関係ありません

青年、修行編？ 髭、何を置いても髭

総隊長 side

儂は四楓院夜一から連絡を受け、一人の男を待つておる

その男は死ぬ間際とは言え、ホロウ虚を見、その攻撃をかわしたという
なんとも興味深い男よ

どうやら、来たようじゃな

「夜一さん。何時の間に3人に増えたんですか？」

は？

「増えるか！はあ、走り回って、酒が回ったのじゃな」

「失礼ですよ。ただ、世界が回ってて、3〜4人に見えるだけです」

「杏里、完璧に酔ってるぞ」

「杏里サンは面白い人デスねえ」

・・・・・・ 儂の覚悟とか、やる気を返せ

む。眼があつたな

「なんという、髭！素晴らしい！！」

こ奴、頭が足らんじゃないか？

四楓院夜一の方に顔を向けると、思いつき顔を反らされた

これが、こ奴の普通なのじやろうな

「髭さんが総隊長ですか？」

「髭ではない、山本総隊長と呼ばんか！」

おお、碎蜂の蹴りが入ったわ

「碎蜂さん。蹴りは避けれませんから、止めて下さい」

「知るか。大して痛くないんだろう。さっさと立て」

渋々立ち上がり、こちらを見てくる

「山本総隊長、俺が死神になった場合の利点を教えて下さい」

ふむ。やっと真面目な話が出るな

「先ず、衣食住の確保じゃな、よっぽどのことをせんかぎりは保障しよう」

これはかなり食い付くのではないか？

「元路上生活者を舐めないで頂きたいですね
なんじゃそれは？」

「家が無いって、ことデス」

「杏里、お前ホームレスだったのか？」

「そうですね。まあ、別にそう困った覚えもありませんし、結構自由に暮らしてましたから」

「案外、暗い過去があつたのじゃな」

ふむ。しかし、衣食は興味があるのではないか？

「で、他には無いんですか？」

「……興味無いのか？」

変わった奴じゃな

「それでは、生きる力を与えるというのは？」

「興味がありませんね。と、というか俺はこのまま転生なり、なんな

りしてくれた方が楽なんですよ」
全く靡かんのう

「杏里サン。良いんですか？」

「何がですか、喜助さん？」

「このまま転生したら、碎蜂さんに会えなくなりますよ」

おお、眼に見えてうるたえおったわ

・・・・・・・・・・・・・・・・碎蜂が

「それは困りますが、まあ些細な問題ですね」
諦めるしかないかの

「あ、杏里！どうしたら、受けるんだ？」

「碎蜂、少し落ち着くのじゃ」

「しかし、杏里が・・・・・・・・」

全く少しは落ち着けというのじゃ

碎蜂は四楓院夜一、一筋じやと思っていたがのう

side out

杏里 side

「杏里サン。受けて頂けませんか？」

「喜助さん。俺には死神になる必要がないでしょう？」

大体、買収しようという考え方が気に入りません

「そこを何とか、お願いできませんか？」

き、喜助さん！頭、上げて下さいよ！！

これじゃ俺が悪人みたいじゃないですか！

「喜助さん、俺は別に嫌とは言って無いんです」

「それでは、受けて貰えるんですね」

すっごく嬉しそうですけど、その笑顔が恐いですね

「総隊長、俺は貴方に聞きたいことがあります」

「なんじゃ、大抵のことなら答えられると思うが」

その言葉、信じましょうか

「俺は貴方達に死神になれ、と言われてここに来ました」

「そうじゃな」

「断った場合は、転生ですか？」

あ、頷かれた

さて、後は質問じゃありませんが

「それだけかの？」

いいえ

「総隊長は一言たりとも、俺にお願いしてませんよね」

そこが、一番気に入りません

なんか、プレッシャーが増しました

まあ、呼吸も出来ますし放っておいていいでしょう

「成程の、確かに儂らから欲しいと言って置いて礼の一つもせんのを、問題じゃ」

分かってくれましたか

あれえ、後ろからのプレッシャーが増しましたよ？

「それでは、西東 杏里。死神になってくれんかの？」

「喜んでお受けいたします」

・・・・・・・・・・死神って、どうやったらなれるんですか？

side out

喜助side

いやあ、一時はどうなることかと思いましたよ
さて、明日から杏里サンには霊院に通って貰いますか
人材不足の折りにいい人を見つけられました

碎蜂サン様々デスねえ

「ふむ。明日から霊院に通わせて、使い物になるのはいつ頃かの？」
「彼の霊圧は高いですが、才能が分かりませんカラねえ」
「何とも言えんか」
「そういうことデス」

「杏里！」

「何です、碎蜂さん？俺、もう寝たいんですけど
というか、彼って

今、ただ霊圧の高いだけの霊なんデスよね
良く隊長格の霊圧で消し飛びませんね

「碎蜂にも春が来たかのう？」

嬉しそうですね、夜一サン

「微妙じゃないデスカ？」

二人共楽しそうデスけどね

「その」

「何ですか？」

「あの、だな」

「はい」

「さ。さささささ」

「さ？」

テンパってマスねえ

「夜一サン？」

「見とる方が面白いから、助けん」

アララ、つれないデスね

まあ、頑張って貰いましょうか

side out

杏里 side

碎蜂さんが、さっきから挙動不審です 丸

ワンピースで言えますが、本当に何をしたいのか分かりません

明日から、霊院というところに通って死神になる勉強をするそうです
死神の学校って怖い気がします

碎蜂さん、落ち着いて下さい

「だから、主語を言って下さい」

さの連呼で分かるほど日本語に精通していません

「さけでも」

さけ？

鮭？明日の朝飯ですか？

「酒を飲まんかと言ってるんだ！」

あー。酒ですか

分かりました

「構いませんよ」

うわぁ、超嬉しそう

美人と酒を飲むのは初めてですね

さつき、美形さん喜助と飲みましたが

差し向かいで飲むんですか？

それとも、四人で？

「差し向かいですか？」

あ、固まった

それはもう、完璧に

アニメとかだと、『ビシイ』と効果音が鳴る位に
可愛いなあ

「そういえば、喜助さん？」

戻ったら、もう一度聞きましょう

「何デス、杏里サン？」

「俺、何処で寝るんですか？」

「む？碎蜂の部屋で構わんではないか」

問題発言ですよ

「俺としては一向に構いませんがね」

碎蜂さん。いい加減戻ってきて下さい

「私と酒を飲むのが嫌なのか？」

帰ってきたと思ったら、なんてことを言っんですか

「嫌な訳ないでしょう」

「まあ、寝るところはそれこそ、廊下でもいいですし」

「邪魔じゃ」

「邪魔デスね」

酷い

「それでは、夜一様。杏里と酒を飲んできます」

「お、おお。行って来い」

夜一さんが押されてますよー

碎蜂さん。地味に手首が折れそうです

力抜いて下さい

side out

翌日、浦原喜助と四楓院夜一は連れたって起こし（襲撃）に行き、杏里の膝で眠る碎蜂を見て『春が来た』と叫び、二人に気付かれるという失態を犯した

青年、修行編？ 髭、何を置いても髭（後書き）

想像したら、主人公が羨ましくて仕方ありません
霊院で苦勞して貰うことにします

作者は、霊院意外は因果の鎖？の奴しか知らないんですが、それ以外にも死神になる方法ってありましたっけ？

青年、修行編？ 学校、普通に学校

「行つてらっしゃい、杏里サン」

「行つてきます。喜助さん」

さて、霊院前まで送つてくれたんですが

俺、何処に行けばいいんです？

「おや？君は誰だい？」

振り向くと、クセツ毛でワカメのような髪型でたれ目な男の人が立っていました

「ああ。西東 杏里といいます。何か、今日からここでお世話になるそうですから、宜しくお願いします」

「随分と礼儀正しいねえ。僕は京楽 春水という者だよ
じゃあ

「春水さんで」

「………君、良く変つてゐるって言われるでしょ」

あれ？何で分かつたんです？

「新人生つて、ことは僕の方が先輩になるのかな？」

「春水さんは何回生なんです？」

「僕は二回生だから、一つ上だね」

「そうなんですか。ところで、彼は？」

何か春水さんの後で凄い形相で立ってますが

「へ？彼？う、浮竹」

浮竹さん？

「京楽！講義はもう始まっているぞ！！」

何か、ビリビリと空気が震えました

「……………何です？超能力ですか？

浮竹さん？は白髪で不健康そうな人でした

「……………身体弱そうですね

「全く、君という奴は」

「浮竹、紹介したい奴がいるんだけど」

「ん？誰だい？」

「杏里君。おいで」

はいはい

「彼かい？」

「西東 杏里です。宜しくお願いします」

「ああ。浮竹 十四朗だ」

それでは

「十四朗さんで」

「……………変わった子だね。君は」

二連続は地味にキツイです

「浮竹！京楽！！」

お？

side out

十四朗 side

現在、俺たちは院長室で話を聞いている
どうやら、西東は総隊長からここに送られたらしい

まあ、西東は嫌そうに院長を見ているだけだが

「で、俺は何処に所属になるんですか？」

「西東君は霊圧は高いが、基礎は出来ていないようだから1回生からだね」

「それでは、教室を教えて下さい」

「ああ。今日は見学で明日から、通ってくれ」
眉をひそめる西東

「案内はその二人に任せるから」

はあ、胃が痛む

「んじゃあ、杏里君行こうか」

「はい」

「で、何から見る？」

「斬拳走鬼でしたっけ？」

「そうそう。まあ、最初は座学だけだねえ」

「それでは、斬から」

「こつちだよ」

side out

京楽side

「杏里君。ここで、斬の実技をするんだけど」

まあ、道場だね

良く山じいにやられたなあ

「見ても良く分かりませんねえ」

まあ、確かにそうだね

「あん？新入生か？」

丁度いいところにきてくれた

杏里君の相手をしてもらおうか

浮竹も同じことを思っ
たらしい
ばつちり眼があつた

「そうなりますねえ。一手ご教授願つても？」

おや？やるきだねえ

「はっ！いいぜ。かかつてきな」

「それでは」

両者木刀を構え相手を睨みつける

「初め！」

轟音

「弱いですねえ。先輩」

えーと

「杏里君。今のはどうかと」

「俺もそう思うぞ」

「斬り合いなんて馬鹿らしいですよ。隙をつければ、それにこしたことはありませんし」

その意見には賛成だよ
だけどね

「木刀を投げつけて、蹴りつて」
「外道だな」

「失礼な」

いやいやいや

君にそれを言う資格は無いよ

相手はつと

「手前、ちゃんと勝負しやがれ!!」

「喚かないで下さい。二日酔いなんですから」
ふ、二日酔いって

「ああ、喧しい。分かりました。もう一度勝負しましょう」

「構え、初め」

合図と同時に駆け出す杏里君
今度は普通に勝負するのかな

「ふっ」

鋭い呼気と共に綺麗な回し蹴りが……………って

「おおい！」

そりゃ、怒りたくもなる

「真面目にやりやがれ！」

今度は、警戒していたらしく杏里君の蹴りをかわして、反対に攻めに出る

「相手の土俵に合わせるなんて、馬鹿のやることです」

確かにそうなんだけどねえ

正面から堂々と言わないよ、普通は

ガキイ！

お、鰐迫り合いにまで持ち込んだ

「このまま、押し切ってやる」

「力み過ぎです」

ふっと力を抜いて相手の脇をすり抜けながら、一閃

「惜しい。西東は剣道でもやってたのか？」

確かに惜しい。

喧嘩慣れしてるみたいな動きだけど

「死にやがれっ！！！」

大上段に振りかぶりって

隙が大き過ぎだね

「ふんっ」

いや、だからね

杏里君

「足刀って、西東」

「君は拳向きかなあ」

斬の授業でここまで体術を使う生徒も中々いないだろうねえ

「んじゃあ、気絶しましたから、次行きましょう」

次は拳の授業か

side out

杏里 side

「で、又道場ですか？」

「道場でやつたり、外でやつたりその時によるねえ」

「西東、次は普通にやれよ」

普通につて

「普通にド突きあえと？」

「そついうことだ」

面倒ですねえ

「あー、丁度いいところに」

「あん？京楽か、ソイツは？」

「杏里君って、言つてね。今日一日彼の案内なの」

「へえ。で、見学か？」

「そうそう。次いでに軽く揉んであげて欲しいんだ」

何か不穏な会話が聞こえますね

「分かった。軽くでいいんならやろうぜ」

「分かりました」

軽く流すぐらいなら

「それでは、始め」

合図と共に走り出し

「シャア」

先輩、意外に速いですね

突きを軽く受け流してつと

相手の後ろに回るように動きつつ、突きを放つ

「危なっ！？」

躲されたので、蹴りを

顔面に

叩きこみます

「ガッ？」

「杏里君、死角からの攻撃好きなの？」

好きというか

「得意というか」

喧嘩って、駆け引きが大事だと思います

青年、修行編？ 学校、普通に学校（後書き）

次は、鬼と走の実践編

杏里君の斬魂刀って、えげつない感じの鬼道系だと思う今日この頃

京楽 浮竹両者がこの時期なのか、全く自信がありません
途中出てきた先輩は、また出るかもしれせん

青年、修行編？ 取りあえず刀との軽い会話（前書き）

バカ天？が進みません
多分、スランプです

反対にこっちのネタは阿呆みたいに出ています

青年、修行編？ 取りあえず刀との軽い会話

「で、次は走ですね」

斬 拳ときたので

「うーん。そうなんだけどね」

「走はなあ」

？ 歯切れが悪いですねえ

「どうしました？」

「走術って、霊圧のコントロールが出来ないと話しにならないんだよ」

「西東は未だ出来ないだろう」

霊圧のコントロール？

「具体的にはどういう？」

「うーん」

「難しいな」

三人で頭を抱えてみます

「そうだ。杏里君、これが見えるかい？」

春水さんの掌の上に光る球が現れました
何ですか、コレ？

「コレが何か？」

「霊圧のコントロールの練習方法だよ」

「ああ、それなら確かに分かりやすいな」

「霊圧を感じて、掌に集中させる。んで、球状にイメージする」

「それで、出来るはずだが」

まあ、やってみましょうか

しかし、霊圧を感じるねえ
取りあえず、眼でも閉じてみましょうか

side out

十四朗 side

さて、どうかな

「京楽、どうみる?」

「分からないねえ。まあ、最初だしね。感じるどころか見つけるのも難しいし」

確かにそうだが、西東は霊圧が高いし
それを操ることが出来れば
かなり簡単に走と鬼が出来るだろう

『!!!!??』

突如、馬鹿みたいな霊圧が眼の前から噴き出した

side out

杏里 side

眼を開けたら、何とも形容し難い場所に立っていました

えーと、眼の前にあるのは・・・・・・・・・・・・・・・・
融けた様に曲がった建物群に

狂った様に踊る人?

うわぁ、眼があった

にじり寄って来たあああああつ！！

いらっしやいませ、我が主

「誰です！？」

私は貴方 貴方は私

「禅問答ですか！？」

いいえ、真実です

うわあ、痛そうな人？ですね

主。我が名を呼んで頂きたい

「名前？」

はい、私の名は『

』です

はい。聞こえませんか

未だ、速いのですか

帰りたいなあ

主、またお会いしましょう

はいはい。また、いつか

世界が揺れました

起きたら、何か周りに人だかりが出来てました
アレですか？集団リンチですか？
反撃しますよ？

「西東。身体に異常は無いか？」
特には
精神は無駄に疲れましたが

「で、この騒ぎは何ですか？」
「あー。杏里君、まずは霊圧を下げて貰えないかな？」
はい？

霊圧？何のことですか？

「杏里よ」

おや？夜一さん。仕事は良いんですか？
碎蜂さんは何処です？

「今から言うことをやるのじゃ」
良く分かりませんが
頷いておきましょうか

「心の中に箱もしくは錠前を描く」
なら、簡単な錠前で

「描いたか？」

「はい」

「次に、ゆっくりと閉めてゆく」

はいはい

お？

「どうやら、成功のようじゃな」

「どうゆうことです？」

「杏里。先ほどお主が出した霊圧は大体席官クラスじゃ」

席官？何ですかソレは？

「二十席からなる死神の役職の一つじゃな。お主はその内の五席位の霊圧を出したのじゃ」

良く分かりません

「夜一樣。危険では、無いのですか？」

「分からぬ。が、大丈夫じゃろう」

置いてけぼりです

この頃多いです

「で、十四朗さんに春水さん。走と鬼どうします？」

「やっぱり、どつかズれてるねえ」

「少しは取り乱す位しても罰は当たらんぞ」

何故か十四朗さんの顔が蒼いです

体調不良でしょうか？

「まあいいや。外でやってるみたいだし、行こうか」

「はあ、胃が痛む」

そっいえば

「夜一さん」

「何じゃ、杏里？」

「今晚どうです？一杯？」

酒を猪口に注いで口に持っていく仕草

「そうじゃな。相伴に預かるとしようかの」

後は、総隊長だけですな

また、暇な時にでも誘ってみましょうか

「で、何処に行くんですか？」

「霊院の第三格技場だな」

「無駄に広い場所だよ」

さて、今度は何が見れるんでしょうね？

青年、修行編？ 取りあえず刀との軽い会話（後書き）

今のところ考えてる杏里君の斬魂刀

？「狂え 響華」

能力は、延々と自分に近しい者の悲鳴を聞かせ続ける

発動条件は、相手が刀の悲鳴を聞くこと

斬魂刀の見た目は、鰐元から刀身に向かって真っ直ぐ伸びる紅い直刀

？「^{まが}旋れ ^{カラスバネ}鳥羽」

能力は、杏里君が見たものを曲げる

発動条件は、杏里君が曲げたい相手の全身を見ること

斬魂刀の見た目は、鳥の名の通りに真っ黒な刀身に黄色い鰐と柄の
ファルシオン

以上です

家の弟と一緒に考えました

どちらか、もしくは両方を足したものを出すつもりです

青年、修行編？ 鬼道？魔法でしょう（前書き）

遅れましたね

青年、修行編？ 鬼道？魔法でしょう

第三格技場

技術開発局局长、浦原 喜助が実験的に製作した空間制作技術を搭載し作られた修行場の一つ

広さは、本人曰く『取り合えず、現世位の大きさにしてみました』

そんな感じの説明を十四郎さんから受けながら、第三格技場と書かれた道場の扉を開けました。

眼の前には、果てし無い荒野

「……………喜助さんって、実は凄かったんですね

「で、さっきから人が出たり消えたりしてるんですが？」

あの瞬間移動みたいのが、瞬歩ですか

霊圧を足に込めるでしたねえ

「そうだな。許可は取ったから練習してみろ」

何時の間に取ったんです？

うわあ、春水さんが嬉しそうです

さて、軽くやってみましょうか

「霊圧を込める。目的地を視認、確認。勢いよく踏み込む」

さて、

「・・・・・・・・・・痛い」
顔面から突っ込みました

「杏里君、大丈夫かい？」

声が笑ってますよ、春水さん

「笑いたいなら、どうぞ」

・・・・・・・・・・言った瞬間、後悔しました

腹抱えて笑わなくてもいいと思います
軽く殺意を覚えます

「もう一度やってみろ、西東」
十四朗さんは優しいですね

side out

春水side

いやあ、久しぶり大笑いしたよ

しかし、

「浮竹。彼、また霊圧上がってない？」
5席って嘘だよな

山じいの訓練時位の霊圧はあるし

「まあ、四楓院 夜一に何か考えがあるんじゃないか？」
「微妙なところだねえ」

怪しいよねえ、あの人
何考えてるのか、分からないし

「言霊による簡単な呪だけじゃあ、抑えられないらしいねえ」

「まあ、言葉と想像だけではそんなものだろう」

杏里君はどれくらいまで、霊圧が上がるんだろうねえ

「霊圧関係ならそれこそ、浦原 喜助辺りがどうにかするんじゃないか？」

「あ、その可能性の方が高いね」

それこそ、霊圧を抑える装身具の類でも作れるでしょ

「しかし、杏里君は下手だねえ」

「確かにそうだが、そういうことは言わない方がいいんじゃないか？」

いや、だって

「霊圧の密度もバラバラだし、安定してないし」

その所為で、さっきからコケテばかりだよ

まあ、最初っから出来ても面白くないしね（主に僕が）

「しかし、西東はあれだけコケテ何で怪我しないんだ？」

「霊圧を高めて防御力上げてるんじゃない？」

「それが出来れば瞬歩も出来るだろうに」

「斬と拳の時には霊圧を込めて殴ってたし、無意識にやってるんじゃないかい？」

意識したら、出来ないみたいだけど

不器用なのか、器用なのかどっちかなあ

それよりも鬼道はどうしようかな

今のままなら、絶対暴発するよねえ

side out

杏里 side

出来ませんねえ

諦めましょうか

コツも掴めませんし

まあ、最初っから出来ても面白くないですしね

何事も挑戦でしょう

・・・・・・・・すいません、嘘です

めっちゃ悔しいです

ぶっちゃけ負け惜しみです

「喜助さん辺りにやり方習いましょうか？」

教えるの無駄に上手そうですね

今日、終わったら頼んでみましょうか

「杏里君。まだやるかい？」

「いえ、今日はもう良いです」

まあ、その内出来るでしょう

「次は鬼道か、西東。それこそ、今日は見学で良くないか？」

何故です。十四朗さん

「霊庄のコントロールが出来ないのに、鬼道が出来るはずがないだろうが」

顔に出てたみたいです

そうですね、また霊庄のコントロールですか

・・・・・・・・斬、拳に絞ろうかな

「瞬歩は使えるようになりたいですねえ」

「まあ、他の歩法云々は何となく出来てるしねえ」

出来てるらしいです

「今日のところは見学ですか」

「そうしなさい」

「それじゃあ、行くか」

はい

「んで、先刻からバンバン火の玉やら、衝撃波？やらを飛ばしてるのが鬼道ですか？」

場所は第七演習場らしいですよ
ただの広場にしか見えませんが

で、皆さん集まって指先からレーザー？みたいな物を飛ばしてます
万国吃驚人間シヨ　ですね

「ああ。今やってるのが、破道で、直接攻撃系。もう一つが、縛道で、防御・束縛・伝達等を行うことが出来る」

破道ねえ

何となくやってみたいですねえ

「やらせないからな、西東」

ジト眼で見ないで下さい

そんなに信用ありませんか、俺？

赤火砲とか、白雷とか聞こえるんですが
非常に、面白そうじゃありませんか？

「まあまあ、浮竹。一回位杏里君にやらせて上げててもよくないかい？」

有難う御座います、春水さん

「しかしなあ」

一発だけ、やらしてもらおう訳にはいきませんか？

何です、溜息なんか吐かないで下さいよ

幸せが逃げますよ

「一発だけだぞ」

やった！

春水さんとハイタッチを交わします

「今から言つ言霊を繰り返して唱えてくれ」

「はい」

ああ、楽しみですね

「君臨者よ」

「君臨者よ」

「血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ」

「血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ」

「焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

「焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

「破道の三十一『赤火砲』」

「破道の三十一『赤火砲』」

s i d e o u t

春水 s i d e

いやあ

これは予想してなかったよ

「暴発で周りを焼け野原にするって、どうよ」
いや、まあ元からただの広場だったんだけど

「西東、大丈夫だったか。おい、西東？」

杏里君は気絶か

まあ、面白かったけどね

さて、

「何処に運べば良いと思う？」

「分からん」

どうしようかなあ

「全く、杏里サンは面白いデスねえ」

これはまた

大物が出てきたねえ

「浦原隊長？何の用でここに？」

「杏里サンの様子を見に来たんデスがね。いやはや、本当に退屈と
は無縁の人デスね」

退屈とは無縁ね。

確かにその通りだ

彼はとても面白い

杏里君は随分と高く買われてるねえ

「気絶したんなら、仕方ありませんね。連れて帰りましょうか」

「杏里君にはまた明日、と伝えて下さい」

「西東に霊圧のコントロールを受けさせて下さい」

「分かりました。それでは」

軽々と杏里君を肩に担ぎあげて去っていく

何というか

「ブツ飛んだ人だねえ」

「ああ」

さて、明日も会えるかな

楽しみだねえ

side out

杏里 side

眩しい

眼が潰れます

「お、杏里。目覚めたか」

おや、夜一さん

おはようございます

「こちらに來い、今日は良い月が出ておる」

はいはい

窓際で酒を飲んでる夜一さんの近くに腰を降ろします

上を見上げれば、非常に美しい満月が煌々と輝いています

良いですねえ

「しかし、俺はどうしてここで寝てるんですか？」

「お主は鬼道の練習中に制御に失敗して気絶したらしいぞ」
おやまあ

「それはまた、ご迷惑を」

「礼なら、喜助に言うのじゃな」
そうしましょうか

「ほれ」

はい？

杯？

「一杯付き合ってくれるのじゃろう？」

ああ、そういえばそうでしたね

酒を夜一さんの杯に満たして
自分の分にも酒を満たしてつと

『乾杯』

堅く澄んだ音と共に口に近付け杯を干す
やっぱりこちらの酒は美味しいですね

「して、杏里よ。霊院はどうじゃ？」

「面白いですよ、知り合いも出来ましたし」

「ほう。それは目出度いの」

嬉しそうですね

その後も暫く無駄話をしながら、杯を重ねました

途中で喜助さんと碎蜂さんも来たので、皆で飲みました

・・・・・・・・・・・・・・・・途中から記憶がありません

頭がガンガンします
明日、いやもう今日です
ね
霊院休みたいです

青年、修行編？ 鬼道？魔法でしょう（後書き）

さあ、喜助との修行フラグが立ったぞ

次の話は5年後位で、始解編と散歩編をやります

青年、実践編？ 刀と対話してみよう

主、まだ我が名を呼んでくれませんか

主、まだ私の名を呼んでくれませんか

我らが主よ、名を呼んではくれませんか？

「また、あの夢ですか」

いい加減にして欲しいですね

狂った様に踊る女や体長3mはある鳥の名前なんて分かる筈がないでしょうが

相変わらず景色は融けた様に曲がった建物群と狂った様に踊る女
それに黄色い鳥が増えただけの殺風景な景色

俺が狂いますよ、いい加減

「杏里サン。少し良いですか？」

喜助さん？

今日は修行はお休みの筈ですが
俺の記憶違いですか？

「はい、どうぞ」

「今日もまた霊圧がブレてますねえ」

良く分かりますね

俺はようやくと自分の霊圧に気付いたところですが
感じるのに3年かかりました
才能が無いのかもしれない

「夢の所為でしょう」

「また、同じ夢デスか？」

はい

頷くと溜息吐かれました

何故です？

「刀との対話を覚えて貰いましょうか、杏里サン」
刀との対話？

「ハイ。本当はもう少し時間をかけるつもりデシたが、そうも言っ
てられないようデスからね」
なんとなく嫌な予感がしますよ

「それでは、付いてきて下さい」
はい

side out

喜助 side

もう少し基礎を固めたかったんですが
刀が杏里サンを呼ぶなら仕方ありませんね
しかし、下手なところで解放されるとマズイデスからね
こちらで場所を提供させていただきマスよ

「喜助さん、ここは？」

ああ、驚いてくれましたか
作った甲斐がありました

「ここはアタシが作った修行場の一つデスよ」
さあさあ、中央に進んで下さいな

「結界、ですか？」

本当に勘のいい人デスね

「ハイ、杏里サンの霊圧は少し高めなので結界内で始解して貰いマスよ」

「構いません、それでこの声から解放されるなら
随分と嫌そうデスね

どんな性格なんデショウか？

「それでは、杏里サン。始めマスよ」

「はい。お願いします」

結界内に入り、刀を抜き正眼に構える杏里サン

この結界が壊れたら縛道で留めなくてはいけないんデスよね
疲れマスよ

杏里サン、無駄に霊圧高いから

「行きます」

「どうぞ」

「軍相八寸退くに能わず・青き門 白き門 黒き門 赤き門・相贖
いて大海に沈む」

言霊を紡ぎ空間に力を満たし、座標を設定し、その空間に向けて解
き放つ

四獸塞門

杏里サンの周りを囲む第一結界『反鬼』と第二結界『鎖縛』に四方を囲む『四獣塞門』

これが破られたら、鉄裁サンに土下座しないといけないんデスよね
どうしましようか

さあ、後は結果を待ちましょうか

Side out

杏里
side

あの結界、強力過ぎでしょう

「で、またここですか」

喜助さん曰く、『刀と会話して下さい』らしいです
分かりません

ようこそ、我が主

ようこそ、私の主

はあ、

「今日は、名前を聞きました」

・ ・ ・ ・ ・ 歡喜に震える鳥と女

嫌な風景ですね

おお、我らが主

いや、そんな感動する程のことですか？

さて、名前ねえ

「先ずは、烏から行きましょうか」
サクサクと

我が名は『
』

何故、聞こえないんです

『
羽』

羽？

微妙に聞こえました

我が名は『烏羽』
ほう

「烏羽とは、また面白い名ですね」

ああ、主よ。やっと呼んで下さった

「さて、アン？……………随分と俺好みの能力ですね」
成程、確かに俺の分身らしいですね

ということは、こちらの女も
「で、貴方の名前は？」

私の名前は『響』

響？

『響華』

響華？

「響華？とは随分と綺麗な名前ですね」

ああ、やっと名前を呼んで下さった

「何とまあ、能力まで俺好みとは気に入りましたよ。二人共」

それでは、我らが主よ

ええ

「『狂え 響華』『旋れ 烏羽』」

「スバラシイ サイコウデス サア、モットセカイヲクルワセマシ
ヨウカ？ソレトモ、セカイヲマゲテ マゲテ マゲテ タノシミマ
シヨウカ？」

主、そろそろ外に出て力を奮いましょう

イイデスネ

ソウシマシヨウカ

眼を閉じて、意識を集中しセカイを壊すイメージをし眼を開ける

結界が揺らぐ気配と意識がブレル感覚が混じる

さあ、愉しみましょうか？

s i d e o u t

青年、実践編？ 刀と対話してみよう（後書き）

杏里君がアレなのは仕様ですから、気にしないで下さい

次は喜助さんをフルボッコにして、九割殺しに遭います

青年、実践編？ 喜助さんと戦ってみよう（前書き）

中途半端

まさしく中途半端

戦闘描写なんて嫌いだ

！！

青年、実践編？ 喜助さんと戦ってみよう

喜助 side

本当に馬鹿みたいな霊圧デスね。杏里サン

あの結界に罅を入れるには最低でも隊長格位の霊圧が要るんデスがね

仕方ありません、縛道の準備もしておきましょうか

また、霊圧が上がリマシたね

解放出来た様デス

罅も大きくなりマシたし

高く澄んだ硝子が割れる様な音と共に結界が砕け散った

うわぁ、土下座しないと行けないんデスカ？

逃げようかしら

「見事に結界を壊してくれマシたね。杏里サン」

「いやぁ、何というか。すいません」

「いや、別に構わないんデスがね

それよりも

「刀が二本とは、二刀一対型では無いようデスし、二本共違う刀デスカ」

「はい。左が響華 右が烏羽です」

「禍々しい感じがする刀デスね

「さて、帰りましょうか。喜助さん」

「ああ。そうデスね。杏里サン能力は知ってるんデスカ？」

「はい。何なら試してみますか？」

おやおや、随分と自信が有るみたいデスね
そういうのは砕きたくなりマス

「良いでしょう。杏里サン、構えて下サイ」

『起きろ 紅姫』

さあ、始めましょうか

「次は、こちらの番ですね。『狂え 響華』」
金属音、いえ、悲鳴？

悲鳴 悲鳴 悲鳴

頭にこびり付いて離れない

鬼道系の能力デスね

それにしても趣味が悪い

最悪の能力デスね

それにしても、この声どこかで聞いたような気が

「これが、響華の能力ですよ。良い感じに狂ってて俺好みです」

これは、かなり精神的にクル物があります
さっさと終わらせて、

瞬歩で近付き一閃

杏里サン曰く、響華で防ぐ
更に上がる悲鳴

……アタシを狂わせるつもりなら、この三倍は持つ
て来て頂きマシヨウか

「これで、終わらせてあげマス」

これ以上聞くと流石に温厚なアタシでもキレマスよ

「こちらの台詞です。『旋れ 烏羽』」

チツ、もう一本デスカ

こちらを視る杏里サン

瞬間、あの眼を見てはいけなと感じた

逃げる

恥も外聞も無く

杏里サンの視線から逃れる様に

「烏羽の能力は俺の眼に入った全てを曲げる、というとても素敵な能力です」

クッ

「血霞の盾」

刀を前に突き出し、盾を作り

杏里サンの視線を遮るように前へ突き出す

杏里サンの視線がこちらの腕に注がれ

次の瞬間、ポキンとあっさりとした音とともに腕が折れた

「ギヤアアアアアアアアッ!？」

何故デスカ!？

「アア、良い感じの悲鳴ですよ。喜助さん。さあ、もっともっとも
っともっともっと俺に悲鳴を聞かせて下さい」

もう逝ってマスね、杏里サン

応急処置は済みましたが、予想以上に厄介な能力デスね

「その腕を斬り落としてみますか？」

「アア、イイデスネ イイデスネ イイデスネ モットタノシミマシヨウヨ キスケサン」

狂い過ぎデシヨウ、流石に

「サア、狂ッテ^{まわ}旋ッテ踊ッテ壊レテ愉シミましょうよ。キスケサン」

「戯言に付き合っている暇は有りません」

延々と夜一サンの悲鳴を聞き続けるのも身体に悪いデスからね

「モウスコシアソビマシヨウヨ」

「アタシはあっさり終わらせたいンデスよ」

杏里サンの死角に回り込みながら斬撃を放つがあっさりと受けられる予想通りデスね

杏里サンに手を伸ばし

「縛道の九十九禁」

杏里サンの手前で拘束するようにバラける鋏とベルト

「舐めないで欲しいですね」

杏里サンが見た途端に曲がり、歪み砕ける縛道

「……縛道まで曲げマスか、アナタは

「でも、無傷とはいかないようデスね」

半分程消し飛ばされましたが、何とか拘束には成功しました
次いで

「縛道の九十九 第二番 卍^{ばんきん}禁 初曲 止^{しりゅう}繃」
拘束完了？デスかね

「しかし、杏里サンの眼を抉る位しないと能力を抑えられませんか」
そこまではやりたく有りませんね

「休憩ですか？喜助さん？」

何デスって？

九十番台でも止められないンデスカ？

「式曲 ひゃくれんさん 百連門」

なら、痛みつけて寝て貰います

「だから、烏羽を舐めないで下さい」

声が聞こえた途端に曲がり始める鉄串

千里眼でも持つてるンデスカ、アナタは

「終曲 ばんきんたいほう 卍禁太封」

拘束は破られて無いンデスカ、このままいかせて貰いマス

杏里サンの頭上に巨大な碑石が降りかかり、そのまま潰しにかかる
これでどうデス？

「旋り狂え」

杏里サンの声が響き、卍禁太封が防がれた
どうやったンデス！？

縛道が解け、杏里サンがこちらに向く
これは諦めて義眼の用意をしましょう力？

「さあ、次はどうします。喜助さん？」
案外、ピンピンしてマスねえ

「さて、本当にどうしてやりマシヨウか？」

高速で杏里サンの周りを走り回り

前後左右 縦横無尽 四方八方 容赦なく斬りかかる
斬撃が逸らされ、躲わされる

本当に後ろに眼でもついてるのデシヨウか？

「さて、真っ向勝負と行きましようか？喜助さん」

・・・・・・あれだけの斬撃を大した被弾も無く
こちらを真っ直ぐ見詰める杏里サン

本当に始解したばかりとは思えませんね

「そうデスね。そろそろ終わりにしましろうか」

切っ先を杏里サンに向け、いつでも斬りかけられる体制を作る

杏里サンがこちらを見た瞬間に斬りかかる

「旋げないんデスカ？」

「気付きましたか、喜助さん」
ええ

何となくわかりましたよ

「アナタの烏羽の能力は、アタシの身体全てが視界に入らないと発
動しない、違いマスか？」

「正解です。何時気付きました？」

真っ向勝負の力技なら、こちらが有利デスね
悲鳴が鬱陶しいぐらいデスカ

「最初にオカシイと思ったのは、アタシの腕を折った後デスね。普通なら追撃として足でも折るのにそれをしなかった。いえ、出来なかった。違いマスか？」

要は、杏里サンの視界から一部でも外れれば良いンデス

何も言わず刀に力を込めて、コチラの体勢を崩そうとする杏里サン
沈黙もまた答えなりデスね

しかし、鏢迫り合いはともかくとして、アタシの方が不利な気がしますね

「延々と悲鳴を聞かせ続ける響華の能力で恐いのは、認識することデス」

「ええ。それが誰の悲鳴か気付くかどうかで、随分威力が違います」
本当にエゲツナイ

杏里サンの腹に手を添えて

「破道の六十三 雷吼炮らいこうほう」

モロに喰ねらったらしく吹っ飛ぶ杏里サン
これで気絶ねて下サイよ

「さて、どうしますかね？」

「何をですか？」
うおっ！？

飛び上がる程驚くつて、アタシは始めて自分で体験しましたよ！！

「あ、杏里サン。すっかり無傷なんデスね」

刀を鞘に納めてマスから、もう戦る気は無いンデシヨウね

「結構痛かったんですがねえ。まあ、腹も減ったんで帰ろうかと」
成程

何かもうどうでもよくなりマシた

「それじゃあ、帰りマスか」

「はい」

青年、実践編？ 喜助さんと戦ってみよう（後書き）

次回から、タイトルが杏里君、散歩編に変わります

追伸

近代哲学の祖の片割れ様から、京楽さんと浮竹さんならもうこの時期隊長でしょ、という有り難い情報提供がありました。

この情報ベースで動きます

杏里君、散歩編？ 拉致監禁は最終手段（前書き）

ぶっちゃけると最後の碎蜂が書きたかっただけの話

杏里君、散歩編？ 拉致監禁は最終手段

「杏里よ、付いてくるのじゃ」

夜一さん

「俺、書類作成中なんですけど」

「そんな物は知らん！」

困るのは夜一さんですよ

まあ、何とかなるでしょう

「で、何処に行くんです？」

「付いてくれば分かる」

はいはい

夜一さん、襟首持たないで下さい
地味に決まっっていて痛いです

「（ゲホ）で、ここ何処です」

喉が痛いです

呼吸が出来ませんでした

場所は何処かのお屋敷？

武家屋敷っぽいですねえ

まあ、居る場所は堀の上ですけど

首を擦りつつ周りを見廻します

「ここは、朽木家の本宅じゃ」

朽木家？

お偉いさんですか？

初耳ですが

「貴様、何しに来た！！」

突然の怒号

「ここで会ったが百年目、今日こそ息の音を止めてくれる！
真つ直ぐ夜一さんを見ながら物騒な台詞を言ってくれるのは

綺麗な黒髪を首元まで伸ばして、綺麗な顔を憤怒の形相に変えた美
青年

誰です？

「フツ。白哉坊、お主が儂に追いつけるはずがなかるう」
不敵に笑う夜一さん
遊んでますね

しかし、何かお兄さんっぽい人ですねえ
そうですね

「白兄さんと呼びましょう」

え？夜一さん？

さつき、白兄さんと追いかけてっこしに行きましたよ
超笑顔です

そして、放置です

・・・・・・帰る

「その御仁は四楓院夜一の知り合いか？」
はい？

今度は誰ですか？

何か白髪混じりで、貫禄のあるというか、無駄に迫力のある御老人が立っていました

何というか昔の老中というか御家老というか
そんな人ですね

「確かに夜一さんの知り合いです。失礼ですが貴方は？」
この人ですか？

「儂は朽木 銀嶺。白哉の祖父じゃ」

へえ、白兄さんのおじいさん

苦勞の多そうな、というか苦勞させられているというか

「まあよいわ、茶くらいなら出してやる。上がりなさい」
はい、御馳走になります

「儂も馳走になろう」

へ？

「白哉は？」

「フツ。まだまだ、若い者には負けんよ」

夜一さんもかなり若く見えますがねえ

で、答えになってませんが

白兄さんは？

「途中でへばったので、置いてきた」

「胸張らないで下さい。夜一さん」

自慢できることはありませんよ

結局今日中には帰って来れず、拾いにいったそうです

二番隊隊舎

『夜一様は何処だ!?!』

『クソったれが!?!』

『夜一様!!夜一様、何処です!!』

「置手紙や言付くらいしても良かったんじゃないですか?」

「面倒じゃったし。仕事も書類ばかりじゃ、気が滅入るわ」

この人、最低ですね

いや、別に構わないんですがね

さて、仕事に戻りますか

side out

side 碎蜂

「夜一様、仕事をさぼって抜け出さないで下さい!!」

全く

杏里も杏里だ

「止める位しても、いいのでは無いか？」
羨ましい

夜一様と一緒に出かけたなんて

「怒られましたね」

「仕方あるまい、ここは大人しく」

「何が大人しくですか!!」

全くこの人は

真面目にやれば、直ぐ終わるのに何故しないんですか

「書類仕事何ぞ面倒臭くてやってられるか!」

無駄に格好いい台詞です

隊長としてはダメですが

「さて、俺は自分の仕事に戻らせて頂きますよ」

「逃がすか!!」

夜一様、そんなに仕事をしたくありませんか？

そして、杏里に抱きつかないで下さい！

「取りあえず、碎蜂さんもノツテないで離れて下さい」

「杏里、儂を見捨てるというのか？」

「杏里。夜一様を思っでここで仕事をしてくれないか？」

多分、これで夜一様もやってくれるはず

「分かりました。さっさと片付けましょう」

よし!!

「・・・・・・・・・・夜一さん？」

「な、何じゃ？杏里」

「俺は書類で埋もれて死にたくないんですが？」

「私もです。夜一様」

「分かったわ。そう、喚くな。さつさと片付けるぞ」

「碎蜂さん。この書類の担当者を明日呼びつけて説明させて下さい」

「碎蜂。この帳簿を付けた奴は四則演算が出来ないのか？」

私は二人の秘書ではないのですが

というか、杏里。そういうことは自分でやれ

夜一様、ただの計算間違いにキレないで下さい

「で、何だかんだやってたら最後の一枚ですね」

「それもこれで終いじゃ」

「お疲れ様でした、夜一様。お茶をどうぞ」

「うむ」

「杏里、茶だ」

「有難う御座います」

仕事も終わり私が入れたお茶で一息吐く夜一様と杏里

私は幸せ

こつという何気ない一時が幸せというものなんだろう

「やっぱり美人の入れたお茶は美味しいですねえ」

「ブウウ ツ?!?!?」

・・・・・・・・・・・・・・・・口に含んでいた茶を吹いてしまった

書類は無事だ

良かった

「碎蜂に、の間違いじゃろう。杏里？」

「手厳しいですねえ。夜一さん」

にこやかに話さないで下さい

どう対応していいかわかりません

「どうじゃ、碎蜂。今日は杏里の部屋で寝んか？」

⌈
^
?
⌋

ああ、何て間拔けな声を夜一様の前で出してしまったんだ
しかし、夜一様は何と言った

あ、杏里の部屋に泊まる？

「えええええええええええつ?!?!」

「ほれ、さつさと行って来い」
よ、夜一様？

眼が笑ってませんよ

冗談ですよ？

side out

夜
—
s
i
d
e

「杏里よ。お主も速く部屋に戻るがよい」

砕蜂は今頃、杏里の部屋で悶えているに違いない

「夜一さん。喜助さんに会うなら、気をつけるように伝えて下さい」

「ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん。」

「最近、護廷十三隊の出動回数が増えているそうですね」

確かにそうじゃが

それがどうしたかの？

「どうもキナ臭い匂いがしますから」

そう言って、部屋を後にする杏里

奴は何か掴んでおるのか？

まあ、そこいら辺は喜助の仕事じゃ

side out

杏里 side

俺の部屋狭いんですよえ

「碎蜂さん。蒲団一組しかないんで、今日はこれで寝て下さい」

「杏里は何処で寝る気だ？」

「俺は床で寝ますよ。流石に一緒に寝る訳にはいきませんから」
さて、何処で寝ますかねえ

「・・・・・・・・・・別に構わないんだが」
はい？

「すみません。聞こえませんでした。何て言いました？」
もう一度お願いします

「私は別に杏里と寝ても構わないと言ったんだ!!」

いや、そんな顔真つ赤にしながら言われても

まあ、可愛いからいいですけど

「本当に良いんですか？」

「クドイぞ、杏里。私がいいと言っているんだから、良いんだ」

うわ、何この可愛い生き物？

抱きつきたいなあ

でも、前やって投げられましたし

「じゃあ、蒲団出しますか」

「あ、杏里？その、私はこういうことは初めてだから、その、優しくして欲しいんだが」

「俺の理性が簡単に融けそうなこと言わないで下さい」

s i d e o u t

杏里君、散歩編？ 拉致監禁は最終手段（後書き）

もうそろそろ喜助さんと夜一さんを現世に放り込まないと不味いで
すね（汗）

散歩編は後2〜3話書いて、ルキアとか恋次とかの時代書いて尸魂
界に一護たちを放りこむ予定です

杏里君、散歩編？ ぶらついてみよう（前書き）

駄目だ、死亡フラグしか立つ感じがしねえ

杏里君、散歩編？　ぶらついてみよう

「さて、今日一日どうしましょうかねえ？」

休みの日って何をすればいいか、考えている間に終わりますからねえ
まあ、そういうのがいいんですがね

「碎蜂さんは今日一日仕事ですし、夜一さんや喜助さんは忙しいんでしょうねえ」

「まあ、適当にぶらつきますか」

運が良ければ面白いものを見れるでしょう

「このハゲツ！！何でウチが手伝わんとアカンねんっ！！」

「だから、君のいきなりキレる癖、正直引くよ、と何度も言っているだろう」

「喧しいわっ！いてこまずぞ、ゴラアッ！！」

「全く喧しい娘だよ、君は」

「何か、面白そうな気配がしますね」

『西東　　！！』

おや、誰ですか？

「手前、殺す」

誰ですか？

「覚悟しろ！！」

何かいきなり襲われました
反撃しますか

しかし、

「遅いですねえ」

もう何というか

遅いとか

「で、どうしましょうか？」

取りあえず、気絶させましょうか

蹴りが来たので、それを躲しながら、軸足を払いバランスを崩して、
接近

「一人目」

拳を固め、鳩尾に決める

「グハッ」

身体を折り曲げて、蹲る誰か

次いでだから、止めさしましょうか

蹲る誰かの頭を思いっきり踵で踏みつける

眼の前に飛び込んで来た拳を屈んで躲して、地面に手を付く
そのまま、身体を捻り蹴りを放つ

後、一人ですね

「手前、絶対許さねえ」

いや、襲ってきたの貴方達ですし

うわあ、この人刀拔きましたよ

「さて、正当防衛ってありましたっけ？」

良く覚えてませんねえ

『喰らえ 劫貴』

始解までしますか、貴方は

面倒ですねえ

「こつちもやりますか 『狂え 響華』」

瞬歩で近付き、一閃

「そこまでやつ！」

硬質音が鳴り響く

止められましたか

誰ですか？折角、テンション上がりだしたのに
邪魔しないで下さいよ

そちらに視線をやれば
先ず、金髪？蜂蜜色？の無駄に長い髪に人を探るような眼
つてか

「平子隊長ですか、退いて下さい」

「アホ。退けるかいな」

むう

「杏里、お前何してんねん？」

「売られた喧嘩は高く買うが、俺の信条です」

「全く困った人達ですね」

おや、惣右介さん

「で、この騒ぎの原因はなんですか？」

惣右介さんの目が恐いので、大人しくしていきましょうか

刀を鞘に納めて、向き直り事情説明

「アホやな、杏里に席官が勝てる訳ないやろ」
嬉しくない評価ですねえ

「全く、この事は五番隊で処理しますか。平子隊長？」

「そうやな。その方がええやろ」

お咎めなしますか？

両方ともに

「んじゃあ、俺は帰りますよ」

「ああ、はよ帰り」

「西東君。またね」

はいはい

そうだ、下に降りて冷やかしてもしょう

side out

平子 side

全く堪忍してくれや

「面倒事はゴメンやで、ホンマに」

「仕方ないでしょう。我々で処理しなければ、色々面倒なことになるますから」

そうなんやけどな

「で、お前等何処の隊のモンや？」

「俺は3番 こっちの二人は6番隊です」

ローズんとこと朽木隊長ンとこかいな

また、面倒な

「どうして西東君を襲ったんだい？」

「俺たちは霊院時代にアイツにノサれたことがあるんです。で、その仕返しに」

アホや、こいつら

「どうします、隊長？」

「どうするもこうするもあるかいな、表に出せんぞ。こんなしょーもないこと」

「まあ、確かに。それでは、嚴重注意つて所ですか？」

「そやな。それが、ええやろ」

「お前等」

『ハイッ』

「もう杏里に喧嘩売るなよ」

『ハイ』

「……………こいつら、もう二〜三回はするな」

「ハゲ真子！！ナンで居るねん！！」
やかましいわっ！

折角、人がシリアス決めとったのに
何潰してくれてんねん

ひよ里に向き直り、何時も通りの舌戦をワイは始めた

side out

杏里 side

さて、何か面白い物がありますかね？

「西東副部長」

おや？

アナタは確か警邏隊の人ですね
俺、担当^{かんりだい}檻理隊何ですけど

「何かありましたか？」

「夜一様からコレを渡すように、と」
そう言つて懷から書類を渡す彼

あれですか？仕事を手伝えと？

「有難う御座います」

「それでは」

さて、何でしょう

魂魄消失事件に対する報告書 まとめ（仮）

・・・・・・・・・・面倒そうですねえ

杏里君、熟読中

「さて、誰かいますか？」

「ハイ。どうしますか？」

さて、いつから付いてきてたんだか

「それでは、警邏隊に各隊の隊長・副隊長格に警告をして下さい。
檻理隊には、各隊の主要人物を警戒するようにと」

「隊長 副隊長もですか？」

「ええ、どうにも嫌な予感がしますから」

「分かりました。それでは、そう伝えておきます」

「頼みましたよ」

さて、帰って仕事しますか
伸びを一つして帰り支度をします

しかし、あの惣右介さん何か違うような
気のせいですね

杏里君、散歩編？ ぶらついてみよう（後書き）

駄目ですね、あの結婚詐欺師と絡ませると死亡フラグしか立ちません

藍染

ちなみに杏里君がいつまでも仕事してないのは不味いだろうと言う事で、隠密機動に入らせてみました

杏里君、散歩編？ 結婚式にご案内（前書き）

久しぶり、本当に久しぶりの投稿

杏里君、散歩編？ 結婚式にご案内

「結婚式、ですか？」

仕事中に白兄さんが来て、招待状を渡してくれました

白兄さん、結婚するんですね

おめでとうございます

「そ、それで 兄にも来て貰いたく、この招待状を出したんだが・・・」

何で俺何でしょうねえ？

夜一さんとかなら分かりますが

まあ、良いでしょう

「行きますよ」

そんなに嬉しいですか？

さて、白兄さんのお相手は誰なんでしょうか？

「で、夜一さんは寝坊ですか？」

「そうだ。それと、杏里。私は招待されてないんだが？」

まあまあ、碎蜂さん

折角、晴着着てるんですから不機嫌そうにしないで下さい

「折角、可愛い服着てるんだから笑って下さいよ」

言ったら、顔が真っ赤になりました

「なっ・・・・・な、何を・・・・・」

口をパクパクさせて何か言おうとする碎蜂さん

俺、何か変な事言いましたかねえ

「杏里、お前も呼ばれたんか？」

おや、リサさん

「ええ。白兄さんから来て欲しいと」

「へえ、ウチんところには八番隊隊長・副隊長へってだけやったで？
白兄さん？俺、偶に一緒に茶を飲むくらいの仲なんですが？」

「あー、杏里。邪魔したわ、またな」

何故か、気まずそうな顔をして去るリサさん
何かあったんでしょうかねえ？

「杏里？」

おお？

さっきまで機嫌が良かったのに、なんですか！？

「いやー、大変だねえ。杏里君も」

「春水さん、理由が分からないんですって、碎蜂さん、刀抜かない
で下さいよ！」

「ハハッ。モテる男は大変だね。頑張つてね」

ああ、味方が去っていく

「杏里、少し向こうにイコウカ？」

恐ッ！？怒った理由が分かりません！

ああ、皆さんの生温かい視線が突き刺さる

side out

夜 side

いやあ、すっかり寝過ごしてしまったわ
折角、白哉坊から誘いがあったのに
寝過ごすとは

まあ、何とか間に合いそうじゃし良しとするか

しかし、相手は誰じゃ？

肝心要の一番重要なことを聞くのを忘れておったわ
まあ楽しみは最後にとっておくものじゃ

『ちよっ！？雀蜂つて、俺死にますよ！？』

『五月蠅い！大人しく当たれ！！』

『誰か、碎蜂さんを止められる勇者は！？』

・・・・・・あ奴等は何をしておるのじゃ？

君子、危うきに近寄らずと言うからの
儂は行くでしょう

杏里のことじゃから、死ぬことはなからう

・・・・・・多分

side out

杏里 side

つ、疲れた〜

やっと、碎蜂さんの機嫌も直りましたよ

『それでは、これより我が孫 白哉とその妻 緋真との婚礼の儀を始める』

あちゃー もう始まつちやいましたよ

「じゃあ、碎蜂さん。行きましようか？」

会場入りは難しくても、堀の上から眺めるくらいなら出来るでしょう

緋真さんですか

どんな人なんでしょうね

「杏里。その、スマン」

何か謝られました

「構いませんよ。それより、見物に行きましようよ」

碎蜂さんの手を取り、会場に向かう

ああ、楽しみです

「ああ、全く綺麗ですね」

白無垢を着て、白兄さんの隣に座る女性

あれが緋真さんですか

「ああ、綺麗だ。だが、何か儚げでもある」
良く見えますねえ

あ、普通に近付いたら入れてくれました
門番、良い人ですねえ

「む、杏里に碎蜂。来ておったのか？」

おや、夜一さん

ちゃんとした格好で来たんですね
安心しました

「夜一樣。次は寝坊しないで下さいね」

「次はな」

まあ、何て信用ならない言葉

次は起こしに行きましょう

『これにて、朽木家婚礼の儀を終了する。客人達よ。礼を言つぞ』
何か無駄話してたら、終わりました

どうでしょうかねえ？

「ほれ、杏里。行くぞ」

ハイ？

何処行くんです？

「白哉坊をからかいにじゃ」
うわあ、嬉しそう

side out

白哉 side

「済まない、緋真。爺様が無理を言って」

婚礼が済み、直ぐに床に伏せた緋真に頭を下げる

「良いんです、白哉様。私は幸せなんですよ」

儂げに笑う緋真

こちらに手を出すが、その手すら震えていて

その笑みは今にも、消えてしまいそうで

それが私は恐くて、思わず手を握りしめてしまった

『もう、帰りません？流石に今出たら相当空気読めませんよ』

『あー、そうじゃな。悪いことしたのう』

『今見た記憶は永久追放の方向で』

『さあ、夜一樣逃げますよ』

『碎蜂。大きな声を出すでない』

『どうやら、大きな鼠が居るようだ』

『……千本桜』

『碎蜂さんの所為でバレタじゃないですかあ！？』

『なッ！？最初に声を出したのは杏里だろうが！？』

『二人共、置いて行くぞ?』

『わっ!待って下さい夜一様^{さん}』
ギャーギャー騒ぎながら去っていく
・・・・・・・・あの馬鹿共め

「クスッ。楽しそうな人達ですね」
私はそうやって、無邪気に笑う緋真が見たかったんだが
どうやら、先を越された様だな

「今度、お前が元気な時に呼ぶか?」

「ハイ。お願いします。白哉様」

杏里君、散歩編？ 結婚式にご案内（後書き）

ぶっちゃけると、白兄さんと嫁の会話で一本書きたい

時代設定？もう、ガン無視で良いでしょう
書きたくなったんで書きました

・・・もう一回、アニメ見直さないとなあ
殆ど忘れてるし

杏里君、散歩編？ いやあ、黒いですね（腹が）（前書き）

そうか、こういうのを冗長というんだな

最近、妄想が垂れ流しになっていつて困るなあ

一応、これで過去編はお終いです

杏里君、散歩編？ いやあ、黒いですね（腹が）

「魂魄消失事件の説明」

「何か魂魄が消える事件だそうです」

「そう。そして、何故か服だけ残っているという恐ろしい事件」

「お主等は何をしておるのじゃ？」

「おや、夜一さん」

「いやあ、仕事も一段落ついたので暇潰しに」

「以外に面白いですよ」

「ほう。ならば、儂の仕事も手伝わせてやろう」

「ええ」

「また、書類溜めたんですか？」

「分かりました」

「そういえば、杏里。情報は集まったのか？」

「いえ、かんりたい檻理隊の皆が頑張っていますけど
大した情報は集まりませんね

「隊首会の方はどうでした？」

「この件に関しては幾つかの隊長・副隊長が動くことになった」

「へえ」

ついに隊長達が動きますか

「何番隊ですか？」

「九番隊じゃな」

拳西さんのところですね

さてさて、面倒ですねえ

スパッと解決って訳にはいきませんかねえ

「どうしますか、夜一様？」

「喜助に誰か使いにやらせるかの？」

「じゃあ、ひよ里さんを使いましょう」

「猿柿副隊長を、どうするんだ？」

「知り合いの方が何かと良いでしょう」

「と、言う訳です。ひよ里サン行ってらっしゃい」

「何かと、言う訳やねん！！ええ加減にせんとホンマにシバクぞ、ゴラアッ！」

相変わらず、元気な人ですねえ

「拳西さんの手伝いに行つて欲しいんですよ」

「ウチやのうてもええやん！！他にも暇そうなんおるやん！？」

まあ、居ますが

科学技術開発局には居ませんよ

「ぶつちやけると、ひよ里サンのことを頼りにしてるンでお願いできマセンか？」

ぶつちやけ過ぎです。喜助さん

ゲーム風に言うと

きすけはぶつちやけた

ひよりはてれている

こうかはばつぐんだ

で、ところです

ひよ里さんって、

「ツンデレっぽくありません？」

「わかりマスよ、杏里サン！それが、そこがいいンデス！！」

いや、そんな拳握り絞めて叫ばないで下さい

「喧しいわ!!」

ドロップキックって、ひよ里さん

「まあ、いいや。何か疲れたし、いつてらっしゃい」

「ああ、いつてきたるわ」

「あいたた………。全くひよ里サンにも困ったものですね」

いや、今のは貴方が悪いでしょう

「それじゃ、喜助さん」

「ええ」

『彼らの無事を祈りましょう』

side out

拳西 side

「け〜んせ〜。あつちに死覇装が落ちてたよ」

死覇装だあ？

「ねえねえ。この死覇装着てた人達何処行つたのかな？ね〜、け〜んせ〜？」

少し、黙れ

白が持つてきたのは、総隊長に探すように言われた隊員の死覇装だ

った

「隊長、こりゃどういう事だと？」

「新手の病気の可能性もある。十二番隊に通達して人を回してもらえ」

「お前等！今日はここに陣を張るぞ！」

「はい！」

別れて陣の作成に励む奴等を尻目に、白は眠っていた
・・・・・・・・・・殺してえ

side out

杏里 side

「皆さん、よく集まってくれました」

「皆の者すまないな」

二番隊隊員のほぼ全員が参加しました
やっぱり碎蜂さんが、声かけたからでしょうか
まあ、刑軍は夜一さん直属部隊なので居ませんが

『何の御用でしょうか？』

「簡単に言いますよ。今から、五番隊副隊長 藍染 惣右介と同隊
隊員 市丸 ギンを拘束して頂きたいんです」
さて、反応はどうですかね？

『質問があります』

おお、流石は二番隊ですね
冷静に聞き返してくれます

「何でしょう？」

『拘束する理由は？』

「今回の魂魄消失事件は知っているな」

おや、碎蜂さん

代わりに説明してくれるんですか

『はい』

頷く一同

「首謀者は五番隊副隊長 藍染 惣右介ではないかという情報を得た」

『!!!?!!?』

混乱中です

「さて、皆さん。理由は分かりましたね」

「それでは、行つてらっしゃい」

言い終わる前に全員がその場から消え去り

残ったのは、俺と碎蜂さんだけになりました

「杏里、本当に藍染が黒幕なのか？私にはとてもそうは思えないんだが」

いや、まあ

俺も犯人だとは思ってませんから

「疑わしきは罰しろと昔から言いますからねえ」

言った瞬間蹴られました

まあ、確かに俺が悪いんですがね

「お前は、そんな理由で副隊長を拘束するのか!」

言い訳をしようと口を開きかけ

窓から地獄蝶が入ってきたため、注意が逸れる

「と、少し待って下さい」

碎蜂さんに一言断り、外に出る

「どうしました？」

『西東副部長。先程、藍染副隊長の拘束を完了しました』

おや、意外に速いですね？

抵抗も無かった？

おかしいですねえ

「何かおかしな点はありませんか？」

『はい。一つ』

「何でしょう？」

『藍染副隊長が、自分は頼まれたただだ。と』

おや？

惣右介さんはそんな戯言をほざく程度の器では無いはずですが
「誰に頼まれたと、言っていましたか？」

『藍染副隊長ご本人に頼まれたと』
はい？

「……………これは、やられましたかね？」

「全部隊に通達して下さい。今夜、あったことは他言無用、墓の中まで持つていくこと。それと、今から任を解きます。逃げ切りなさい。後、彼の記憶を封じなさい。方法は問ません」

『宜しいのですか？』

「いいんですよ。何か言われたら、俺が責任取りますし」
別に死神だけで食っている訳ではありませんし

この程度で処刑にはなりませんし
「市丸 ギンの方はどうですか？」

『現在、調査中です。今は森にまで手を広げていますが、芳しくありません』

何処に行ったんでしょう？

「因みに拳西さん達は何処に？」

『尸魂界の森です』

もしかしなくても、負けですかね
今から行っても間に合いませんか
「後は、何かありますか？」

『いえ。以上です』

地獄蝶を離し、踵を返す

「どうだった？」

「全く駄目です。というか、下手を打てばバレます。今回は、静観ですね」

「次は尻尾を掴めよ」

ええ

今回は、逃しませんよ

side out

藍染 惣右介 side

「どないしたん、副隊長？」

「いや、鏡花水月に違和感を感じてね」

まさかバレタなんて事はないと思うが

「不安要素が出てきたようだ。計画を急ごう」

「ほな、どないします？」

確かに平子隊長達への実験は、急がせる訳にはいかないが、実験台は他にもいる

「ギン」

「行つてきますわ」

ああ、沢山捕まえてきてくれ

『藍染様』

要か

「何かあつたのかい？」

『浦原 喜助と握菱 鉄裁がこちらに向かっています』
ほう、浦原喜助が

さて、どうしようかな？

「要、ギンを呼び戻してくれ」
要の気配が消えた

早めに戻ってきてくれると楽なんだが

side out

とある警邏隊隊員 side

「おい、部隊長から撤退命令が出たぞ」

「どういうことだ？」

市丸ギンを補足して、これからって時に撤退だと

「どうやら、裏をかけられる可能性が出たらしい。これ以上は自殺行為だ」

「しかし、『見つけたで』・・・・・・・・・・！？」

見つかった！？

まさか、霊圧も完璧に消したはず

どうして！

「ほな、さいならや」

刀身が真っ直ぐ、俺に伸びていき
腹に吸い込まれた

「ガッ！？」

そして、刀を首筋にあてがい引く、ただの作業だといわんばかりに

繰り返し同僚を殺していく市丸ギン
それが、俺が見た最後の光景だった

side out

杏里 side

修行場にて、夜一さん達を発見しました

「取り敢えず警戒解いてくれませんか？ 突き出すつもりがないのは分か
つてるでしょう」

「杏里サンよくここが分かりましたね」

まあ、暇つぶしにきたんですが

「で、皆さんの様子は？」

「アタシを舐めないで下さいね。絶対救ってみせますよ」

おお、喜助さんが燃えている

珍しい光景です

「杏里、本題はなんじゃ」

嫌そうな顔しないで下さいよ

「碎蜂さんに一言お願いします」

真顔で言ったら、夜一さんがコケました

・・・・・・本気で言ったんですがねえ

「相変わらずですなあ。杏里殿は」

そうですねえ？

「碎蜂に一言と言われてものう。別にこれといってないが」

「まあ、置いてかれる人に一言」

「そういう言い方は卑怯じゃと思うんじゃないが。そうじゃな、杏里代わりに謝っておいてくれんか？」

「分かりました。碎蜂さんに伝えておきます」

「そして、喜助さん」

「何デスカ、杏里サン？」

「ひよ里さんに謝っておいて下さい。『俺の所為で巻き込んですみません』と」

「ひよ里サンを巻き込んだのは、アタシの所為デスよ？杏里サンが最善を尽くしたのは皆知ってイマス」

「それでも、誤っておきたいんですよ」

「はあ、分かりました。伝えておきます」

「杏里サン。アタシからも一言いいデスカ？」

「おや、喜助さんからですか？」

「無茶をしないで下サイね」

「んー。まあ、適当にやりますよ。それでは、またいつか」

瞬歩で修行場から飛び出し、二番隊隊舎に向かう
さて、仕事頑張りますか

「碎蜂さん。大丈夫ですか？」

あの件の後、夜一さん達がいなくなりました
で、碎蜂さんが引き籠っています

・・・・・・・・伝言伝え忘れました

「碎蜂さん？」

戸を少し強めに叩き、中の様子を伺う

反応すらない

霊圧は部屋内で固まっていますし、死んでいるわけではなさそうですが

「碎蜂さん、入りますよ」

戸を引き、中に踏み込む
そして、部屋の中を見回し

入ったことを後悔した

「・・・・・・・・碎蜂さん、夜一さんのこと好き過ぎでしょっ」

先ず、目に入るのは夜一さんの全身画（笑顔ver）

次いで、右に視線をやれば何処で見つけてきたのか、夜一さんの猫姿の写真集

左には、人間時の夜一さんのポスターだの、写真だのがもう壁一面にベタベタと

そして、碎蜂さんの寢床の周りには夜一さんの人形と何故か俺の人形その人形二体に挟まれている碎蜂さん自身の人形

帰りたくなりました

俺は踵を返し、そのまま帰ろうとした時に声をかけられました

「あ、杏里？その、な。これは違うんだ、だから、違うんだ！」
碎蜂さん

何が違うのかは俺には欠片も分かりません

狼狽した様子で、ワタワタと手を振り回しながらこちらの進路を妨害する碎蜂さん

寢間着のまま来ないで下さい
目のやり場に非常に困ります

いや、入った俺が悪いんですけど

「取り敢えず、服着てから話しましょう」
何か言い訳？みたいのを必死に話していた碎蜂さんに声をかける

どうやら、今の自分の恰好に気付いた様です

「で、出てけ

っ!？」

蹴り出されました

取り敢えず、真っ赤な顔した碎蜂さんを脳内保存してきます

「も、もういいぞ」

まだ若干顔が赤い碎蜂さん

「部屋片付けたんですね」

ポスターだのなんだのがすっかり無くなってます

「忘れる」

首筋に光る刃と彼女のマジな顔が非常にナイス

「はい。きっちり忘れさせて頂きます」

「で、今日は何の用で来たんだ？」

「夜一さんからの伝言を伝えにきました」

お、固まりました

「今、なんと言った？」

「夜一さんからの伝言を伝えにきましたと、言いました」
瞬間、碎蜂さんが泣いてしまった

「……何ででしょうねえ」

「碎蜂さん。どうしました？」

「グス……だ、大丈夫だ……直ぐにお、治まる……
・ヒック……」

「碎蜂さん。俺は外に出てますから、また暫くしたら、声をかけて下さい」

泣き顔なんて見たくないですよ

碎蜂さんには、いつも凜としていて恰好良くて、それでいて可愛い反応を見せてくれる

いつもの碎蜂さんに戻って欲しいんです

「あ……杏里！行くな！お前まで、行ってしまうと私は……
・……私は」

泣きつかれました

さて、俺の取るべき行動は

1・抱きしめて慰める

2・無視して外に出る

3・碎蜂さんの泣き顔をじっと眺める

「……碌な選択肢がありませんねえ
俺の脳味噌はちゃんと機能してるんでしょうか？」

2は論外ですね

3は心惹かれるものがありますが、後が怖いんで

まあ、普通に考えて1ですね

「碎蜂さん」

肩に手を置き、碎蜂さんの顔を正面にもってきて、そのまま抱きしめる

「杏里、うわああああああああっ!!」

杏里君、散歩編？ いやあ、黒いですね（腹が）（後書き）

最後、いったかねえ？

次回から、タイトルが杏里君、教鞭編になります

杏里君、教鞭編　？　誰ですか？妹？そうですか（前書き）

最近、『東方陰陽鉄　ブロントさんが幻想入り』を見てハマった作者が通ります

杏里君、教鞭編　？　誰ですか？妹？そうですか

「白兄さん。俺に用とはなんですか？」

取り敢えず、仕事中に呼び出すのは止めて下さい

「今日は兄に頼みがある」

「頼み？」

珍しいですね

「霊院で、教鞭を取ってもらいたい」

・・・・・・・・・・・・はい？

「俺の聞き間違いでないなら、霊院で教師をやれと、聞こえましたか？」

どうか俺の聞き間違いであって下さい

「そう言ったのだが」

無情にも、白兄さんは俺の望みを断ってくれました

「理由はなんですか？」

「私の妹を見守ってもらいたい」
はい？

side out

朽木ルキア side

「朽木さん。今日、拳の実技の先生が変わったらしいよ」

「どういうことだ？そんな急に変わるなんて」

「なんでも一身上の都合とか」

ふむ？どういうことだ？

二人して頭を捻るが答えなど出るはずもなく

暫くして、その時間がやってきた

仕方なく私たちは授業を行う第三格技上に向かう
道場の門を潜り、前方に視線を向ける

遠くに一人の人間の影を見つけることが出来た
多分、あれが件の新任教師だろう

ある程度まで近づくと口を開き

「あー、貴方達も授業ですか。大変ですねー」
そんなことをのたまった

・・・・・・・・・・・・・・・・変わった奴だ

「皆さん。宜しく願いしますね。俺の名前は西東 杏里です」
杏里か

いや、一応教師なのだし
西東か？

「さて、講義を始める前に一つ言っておきたいことがあります」

「俺は貴方達が死神になりたいと願ってここに来た、と聞きました。
だから、俺の授業中にサボる人にはそれ相応の報いを受けてもらいます」

『具体的には？』

「そうですね。12番隊への実験台とか書類が溜まりまくっている8番隊への応援とか後は、俺の実験台になるとかですかねえ」

『それはご褒美ですか？』

『われわれの業界ではご褒美です』

「誰ですか、こんなの入れたの」

嫌そうだな
私も嫌だが

「あー、もういいです。では、これから、簡単なテストを行います」

『え ツ！？』

「今文句言った人達、前に出なさい。顔を覚えますから」
怒らせたかな？

まあ良いわ。私には関係ないからな

「さて、テストと言っても誰でも出来るものです」

『せ せんせー！？これ何時解いてくれるんスカ！？』

「何時縛道をかけたのだ？」
全く気付かなかった

「あー、なんか前に出た瞬間に」
早業だな

「俺が反省したと思うか この講義が終わるか あなた方が打ち破るかしたら」

『やつべー、このせんせー結構キツツイ!!』
随分と余裕だな

「なんなら詠唱アリの縛道にしますか？」

『『遠慮します』』

「なら、静かにしてて下さい。テストは単純明快、俺から一本取る。それだけです」

「………かなり厳しいのでは無いか、それは？」

「あ、もちろん。手加減しますよ。具体的に言々と席官に入れる程度の霊圧でやります」

「………それもかなり厳しいと思うが」

まあ

「面白いではないか」

「おや、やる気になりましたか。名前を聞いておきましょう」

こちらに顔を向けて嬉しそうに笑う西東

「………地雷を踏んだか？」

「私の名前は、朽木 ルキアだ」

「成程、貴女が」

確かに良く似ていると、意味の分からない言葉を発しながら頷く西東
何に納得したのか、ひとしきり頷いてこちらに向き直り、足を引い

て簡単な構えを取る

「さあ、かかってきなさい。ああ、なんなら全員でもいいですよ?」
不敵な笑みを浮かべる西東とそれを聞いていきり立つ級友達

さて、どうするかな?

side out

藍染 惣右介 side

「ギン。今年の霊院入学者に目ばしい者はいたかい?」

「ボクとしては、藍染隊長の意見を先に聞きたいな」

「ふむ。それでは、今年の新入生の中からはこの二人を取ろうと思う」

そう言い、手元に持っていた書類をギンの手元に放る

「これは?」

手に取り、書類を眺めるギン

「今年の入学者の一覧さ」

まあ、まだ細かいことは不明だが
それは卒業までに調べればいい

「へえ。なら、誰を取るのか教えてもらっても?」

「構わないよ。要も聞いていてくれ」

「ハッ」

相変わらず硬いね

「さて、僕たちが新たに加えるのは、雛森 桃 吉良 イズルの二人だ」

写真が移った紙面を渡す

「役に立つんですか、こんな子供がボクにはとても思えないんじゃないかと」

「私もそう思いますが」

「二人の意見はもつともだと思うが、僕は彼ら二人が僕たちの計画にとっても役に立ってくれると信じている」

「藍染様がそうおっしゃるなら」

流石は要だ

良く引き際も分かっている

「そやね。隊長には自分の考えがあるんやろ」

ふむ、ギンが大人しく手を引くのは珍しいな

「ボクはボクの考えで動くで」

「別に構わないよ。大局が変わらなければね」

さて、少し忙しくなるかな

side out

碎蜂 side

（今日の隊長コエエ 何があつたんだ？西東の奴も居ねえし）

「大前田。何を怯えている？さっさと仕事をしろ」

「ハイハイイツ！」

全く杏里の奴は何処に行ったんだ

side out

杏里君、教鞭編　？　誰ですか？妹？そうですか（後書き）

碎蜂って、この時期隊長？

次回は、もう少しルキアと絡ませて

雛森なんかも出す予定です

ルキアと恋次って同じクラスだと思ってたんですけど、違うんですね
過去の話がチラッと出たとき驚きました

杏里君、教鞭編 ？ 元気ですねえ（前書き）

吉良君が話に絡ませにくい
卒業編くらいで出したいなあ

杏里君、教鞭編　？　元気ですねえ

杏里 side

「さて、今回も目立った動きはありませんか」
中々、尻尾がつかめませんね

警邏隊と檻理隊でもつかめないのは相変わらずですか
さて、次はどうしますかねえ？

「やっぱり、頭のいい相手を敵にすると大変ですなえ」
うーん

あ、背骨鳴った

報告書を何度読み返しても特に変わりはなく
院生相手の講義にもなんとなく慣れてきて
力まないでいい感じに力が抜けて
お茶を落ち着いて飲めるくらいになりましたね

と、誰かきましたね

「開いてますよ」

扉に向かって声をかける

「失礼します」

扉を開けて入って来たのは、朽木ルキアさんでした
おや、珍しい

「何の御用ですか？」

「私のとも……知り合いのことで
ふむ？」

阿散井恋次さんのことですかね？」

「さて、どのようなことですか？」

「実は、おかしな声が頭から響いてくると
おや？」

これはひょっとして
斬魂刀ですかね？」

ふむ、時期としては若干速いですが
まあ、面白いかもしれません

ああ、どんな刀なんでしょうね

「と、そういえば誰が」

「雛森 桃です」

雛森さんですか

確かに彼女は優秀ですが
そうですか

さて、どうしますかねえ？」

……少しばかり背中を押しても罰は当たりませんか

「あの、教官？
ん？」

「ああ、すいません。少しばかり考え事をしてました」

「それで、どうでしょうか？」

んー

「ここに呼んで下さい。そのお友達を。ああ、知り合いは沢山いた方が緊張しませんかね」

side out

雛森 桃side

えーっと

「朽木さん、西東先生が何の用だつて？」

暇だからいいけど

「うむ。雛森が前に話していた声のことを話してみたら連れてきてほしいと言われてな」

えっ！？話しちゃったの？

「気のせいかもしれないから誰にも言わないでって、言ったのに！？」

「はっはっはっはっ、気にするな。ほら、着いたぞ」

そう言い朽木さんはさっさと扉を開けて入っていつてしまった
どうしよう、このまま逃げようかな？

でも、悪いしなあ

「何やってんだ、雛森？」

「ひゃあ！？」

突然、後ろから声をかけられ慌てて振り向くと阿散井君が心配そうにこつちを見ていた

「え、な、何が？」

「だって、ここ西東の住処だろ？こんなところに何の用があるんだ？」

「うーん、相変わらず西東先生のこと嫌ってるな」

「なんでだろ？」

「うん。なんか呼ばれてて」

「苦虫を噛み潰した様な顔をする阿散井君」

「阿散井君が何か言おうと口を開きかけたとき入口から西東先生がこちらに顔を出してきた」

「ん？おや、阿散井さんも一緒ですか。どうぞ、お入り下さい」
「うー、逃げ道がなくなっていくよー」

「阿散井君がすごく不機嫌です」

「吉良君とか来ないかなー」

「西東先生の先導の元部屋に入る」

「部屋内には調度品の類は殆どなく」

「窓は開け放たれ、外の景色が眼に優しい」

「特に眼を引くものは………ないといいなあ」

「オイ、西東。これはなんだ？」

「なんだって、結界ですよ。非常に簡単ですがね」

「結界なんて何に使うんだろう？」

「さて、雛森さん。この中に立って眼を閉じて下さい」

「え、あ はい」

「言われるままにその結界の中に入り眼を閉じる」

「瞬間、意識が遠のくような嫌な違和感が身体を駆け巡る」

「グッ・・・」

「ああ、成功ですね。そのまま楽にして下さい」

「オイ、雛森！速くそつから『邪魔はさせませんよ』……………」
「テメエ！？」

え、何があつたの！？

「恋次、諦めよ。西東に本気で来られてはたまるまい」

「チッ」

うーん。眼開けてもいいのかなあ？

「雛森さん。そのまま自分の内に意識を向けて下さい」

「分かりました」

気になるなー

まあ後で聞けばいいか

うーん、内と言っても

何も無い気がするんだけど

？

声？

もつと聞こうと意識が集中し、途切れた

side out

杏里 side

「さてさて、どんなものが出るんでしょうねえ」
ああ、楽しみですね

おや、どうしました阿散井さん？

「どういっつもりだ？」

うん？

「西東よ。先程は止めたが、狙いはなんだ？」

朽木さんですか

さて、どう説明しましょうかねえ？

『西東分隊長、お手紙です』

あー、仕事ですか？

「通常業務はすべて碎蜂さんに任せただけですが？」

『隊長からの手紙です』

うん？碎蜂さんから？

何の用でしょうか

「ふむ。それでは、少し待っていて下さい」

机にある要らない紙面の裏に更々と書きつけてつと

「これを碎蜂さんに渡して下さい。後は、隊長たちの素行調査でも
しますかね」

『御意』

さて、手紙は

「オイ」

「何です？まだ雛森さんは起きませんよ」
声は聞こえたはずですが

「さっきのはなんだ？」

何かおかしいところでも？

「俺の同僚ですが、なにか？」

「あれは二番隊の隊員だろうが！！」

うーん？何が言いたいのでしょう？

「それが何か？」

あれ、頭抱えてどうしたんです？

「だーかーらー！なんで西東が二番隊の隊員と同僚なんだよ！」

「西東はこの教員だろう？何故二番隊と面識があるんだ？」
んー？

「俺が二番隊に所属しているからですよ。ついでに言うと今年で三席になりました」

まあ、席官になる前から比べてもそんなに変わった気はしませんがね

おや、どうしました？

まあいいでしょう

さて、雛森さんはっと

ふむ。霊圧が上がりましたね
もう直ぐといったところでしょうか

手紙の中身はつと

・・・・・・・・・・思わず空を眺めて黄昏る
その後、片手で額を覆い、溜息を吐く
・・・・・・・・・・余り可愛いことを書かないで下さいよ、碎蜂さん

『弾け、飛梅』

おや、出来ましたか

さて、そう対処しましょうかね？

「西東先生」

はい

「有難う御座いました」

ん？

雛森さんが深々と一礼して帰っていきま
した
うーん？

「まあいいでしょう。さて、朽木さんも阿散井さんもお帰り下さい」
何時までも固まってないで

俺はこれから碎蜂さんと大事な予定が入ったので先に帰りますよ

「へっ？あ、ああ。恋次帰るか」

「お、おう」

さてさて今日も可愛い碎蜂さんを眺めるとしますか

杏里君、教鞭編 ? 元気ですねえ（後書き）

そろそろ碎蜂に会いたくなつたので、次回は碎蜂との絡みです

聞きたいんですが、一応、尸魂界篇と破面篇はやる予定ですが、その間に当たるアニメオリジナルをやった方がいいですか？

やった方がいいなら 1 を

やらないで欲しいなら 2 を

押して送って下さい。

期間は次の話が投稿出来た時までです

お手数ですが、宜しくお願いします

杏里君、教鞭編 ？ 可愛いなあ（前書き）

危なかった

読み返したらR18指定だった

杏里君、教鞭編　？　可愛いなあ

「そういえば、碎蜂隊長」

「どうした、松本？」

「その指輪どうしたんです？」

「あ、え、これは、その、な、なんでもない！」
クソッ。外し忘れた！私としたことが

慌てて後に隠す

「妖しー、何々、杏里からの送り物だったりします？」

「何故分かった!？」

「これは面白くなったわね。碎蜂隊長、その時の様子話して下さい
よ」

に、逃げ道は？

「逃がしませんよー」

「絶対言っものか　　!？」

「フッフッフ。さあ、観念して下さい。さあ　さあ　さあ　さあ!!--!」
松本が恐い

side out

杏里 side

「平和ですねー」

「ああ、隊長は会合で暫く戻らないだろうしな。と、茶が切れたな。西東もいるか？」

「ええ。頂きます」

さて、今日はどうしますかねえ？

「そういえば、さつきから西東は何を読んでるんだ？」

「んー、各隊の隊長の素行調査とかですかね」

具体的に言つと各隊長の過去の行動やらですね

流石に詳しいことは分かりませんし、繋がりも見つかりませんが

ああ、惣右介さん辺りなら、情報操作出来る可能性もあるんですね
これは失敗でしたかね

今度は、七番隊と九番隊を中心に攻めますか？

正義バカが気に入りませんし

それとも、真子さんたちからの情報待ちですかね？

動いて眼を点けられるのも癪ですから

「お前が小難しいことしてくれるお蔭で、俺は助かってるんだぜ」
おや、嬉しいことを言ってくれますね

「あれ、お前指輪なんてしてたっけ？」

「ん？ああ、この前碎蜂さんと買いに行きましてね」
可愛かったですよ

「ふーん。まあ、ノロケ話くらいなら聞いてやるぜ。今の仕事も一

段落したし」

おや、それは嬉しいこと

「それでは、碎蜂さんの可愛らしさを語らせて頂きましょうか！」

うう、後で覚えているよ。松本

あれは、この前の休みの時だった

私は、休みの日にいつもやっている様に杏里の家に朝ごはんを作り
にい……………

わ、笑うな！良いだろ、別に私がご飯作っても！

……………あ、杏里も喜んでくれるし

「くくつ。い、いえ。べ 別に良いですよ。そのまま続けて下さい」
(か、可愛い。碎蜂隊長、めっちゃ乙女やってる)

コホン。その日は杏里が珍しく起きるのが遅くてな
私が起こしに行ったんだが

そ、その杏里に部屋に入って／＼

「あー甘い甘い」

う、嫌い！

「それで、杏里の部屋に入って、どうしたんです？」

え、えーっとな

杏里が布団に横になってて、その、気持ちよさそうに寝ていてな

「ふむふむ」

その、起こすもの可哀そうだと思ってな
そのまま、起こさずに置いたんだが

「ヘタレだ

！？」

だ、誰がヘタレか！

「何、言ってますか！？そこは、優しく起こすなり 隣で一緒に
寝るなり キスするなり色々あるでしょーが！！」

そ、そんなキスなんて／＼／＼

「なんでそこで赤くなるんです！？もうキスの一回や二回はしてま
すよね？！」

し、してないぞ！

精々あーんしたり、膝枕で一緒に寝たりしただけで

「そっちの方が恥ずかしいですよ！？」

そ、そうか？

確かにあーんはレベルが高い気がしたが

「うわ、結構なバカップルやってる!？」

なっ!？

誰がバカップルだ!!

「はつきりと言えますが、貴方達です」

そ、そうかな

「何故 テレるし」

えーっと、何処まで話したっけ

「杏里を起こしに行って帰って来たところまでです」

そうか、それなら杏里が起きてきたところから話すのでしょうか

side out

杏里 side

この前の休みの日の話です

「へえって、三日前じゃねーか」

ええ、何か問題でも？

「いや、別に。んで？」

ええ。実は碎蜂さんが、自分が休みの日に毎日朝食を作りに来てくれましてね

「爆ぜろ！」

？

良く分かりませんが

いい匂いがしたので、寢床から出て居間に行くと、碎蜂さんがソワシしながら待ってたんですよ

「なにそれ、可愛い」

ええ、もう毎回思いますがあの人は俺を萌え殺すつもりなんですかね？

それで、顔を洗って一緒に朝食を食べたんですよ

「ふーん。碎蜂隊長の料理ってアンマ想像できねーけどな」
いえ、結構美味しいですよ

最初なんて、指を包帯と絆創膏まみれにしながら食材と格闘してましたからね
もう本当に抱き締めたかったですね

「朝飯のメニューは？」

えーっと、鯖の味噌煮に白米に卵の味噌汁、後は簡単な野菜の詰め合わせですね

「普通の朝食だな」

ええ。それを碎蜂さんとあーんしながら食べました

「うわっ！殴りてえ！！」

ええ。これが俺じゃなかったら、俺は俺を殴っていたでしょうね。
……割と本気で

「んで、次は？」

二人で皿洗いを

「いや、そこはいい」

それでは、二人で買い物に行った話を

side out

碎蜂side

「で、二人でラブい空間を作りながら皿洗いしたと」
うむ。それより、どうした松本？そんなに疲れた顔をして？

「いえ、なんでもありません。どうぞ、続けて下さい」

（失敗したかなー。まあ、碎蜂隊長も嬉しそうだし。仕事サボる口
実になるから、いつか）

その後、杏里と買い物に行くことになってな

「何買いに行っただんです？」

食材と……この指輪を

「へえ」

（杏里、どうやったんだろ？指輪なんて碎蜂隊長受けとらないと思

うんだけど)

皿洗いも終わって、杏里と居間でボーっとしてたんだが
杏里の奴、いきなり書類持ち出してきて整理を始めたんだ

「杏里つたら、相変わらず真面目ですねー」

うむ。暫くそれを眺めていたんだが
その、暇になってな

「というか、杏里は彼女が目の前にいるのになんで仕事なんかする
んでしょう?」
まだ付き合ってない!

それで、杏里の横に行って気を引こうと思ってな

「何したんです?」

裾を引っ張った

「は?」

だから、裾を引っ張った

(か、可愛い!)

「で、杏里の反応は?」

うむ。笑顔でこちらの顔を見てくれてな
頭を撫でながら、謝ってくれた

それで、一緒に買い物に行くことになったんだ

「へえ。ということはデートになるわけですね」

思っけても口に出すな！

考えないようにしてたんだから！

「食材はどうでもいいんで、指輪を買った話をお願いします」
(碎蜂隊長、顔緩みまくってんだけど。キャラ違うなあ)

む。それでは、ある程度食材も買ったから、帰ろうとしたときにな

ある店を見つけたんだ

「へえ。どんな店です？」

その店はどうやら、えーっとなんて言うんだ？

あの指輪だの首輪だのを売っている店

「あー、あの店ですか？あの店は屋号ありませんよ。皆、『指輪屋』だの『飾り売り』だの言ってます」

ふむ。何故かその店に強く惹かれてな

中に入って、店内を見回したんだ

「あの店って、色々置いてありますけど、指輪に無駄に宝石つけてないから結構人気なんですよー」

そうなのか？

まあ、派手なのは好みじゃないからいいんだが

「で、杏里とそれをペアで買ったんですか？」

いや、杏里のものは素材は私の物と一緒にだが、銀細工に金で風の彫り物がある

「碎蜂隊長の物は、光らないように彫り物がありませんもんね」
ああ、これも杏里が選んでくれたものだ

店主と杏里が何か話していてな
私は店内を好きに見させてもらったわけだが
中々変わった店だな、あそこは

「ええ。何故か、砥石や漬物石も売っていますからね。多分、石と
名のつくものを全てを集めたって感じのところですからね」
本当に変わった店だな

ああ、だからか
ご婦人方もいらしていたから、なんだと思ったんだ

で、杏里が店主から何かを受け取ってな
こちらに持ってきたんだ

そして、私の手を取って
今日一日付き合ってくれたお礼だと言って、指にはめてくれたんだ
もう嬉しくてな

「はー、紳士ですねー杏里」
うむ。因みに右手の薬指だな

side out

杏里 side

「爆発しろ!!」

はい？

どうしたんです、いきなり

「いや、叫ばずにはいられなかったただけだ」

本当に今日はどうしたんです、希千代さん？

「いや、他人のノロケ話がこんなに殺意が湧くものだとは思わなくてな」

そんなもんですかねえ？

「で、買い物はいいから、指輪の話をしてくれ」

それでは、貴金属店に行ったところから

「いや、指輪を渡された隊長の反応を」
むう。

仕方ないですね

その店主から目立たないで、送りものとしては、そこそこ喜ばれる指輪をいくつか出してもらいました

それで、俺が気に入った物で碎蜂さんに似合いそうな物を選びまして

碎蜂さんが、店内を回っているのを発見しまして

右手を取り

「ん？左手じゃないのか？」

左手なら、もっと場所を選びますよ

「それもそうか」

ええ。その時の碎蜂さんの様子は

顔を真っ赤にしながら、こちらを見詰めてきて

もう可愛いなのなの

「落ちて着け西東」

大丈夫ですよ

その後、真っ赤になつた碎蜂さんを連れて帰る時に修兵さんに会
ましてね

「・・・・・・・・・・・・・・・・えーっと、新しい胃薬は何処だっけ？」

そつちの二段目の棚です

「後で渡しに行くか」

お願いしますね

「んで、そのまま帰つて解散か？」

はい。最後に軽く耳元に

「いや、もう聞かん」

おや、それは残念

それでは、残つた仕事を終わらせるとしましょうか

side out

碎蜂side

その後、私は赤い顔を見られない様に隠しながら・・・・・・・・・・
どうした、松本？

机に突つ伏して

疲れたなら、お茶を入れてやろうか？

「いえ、いいです。それより、もう終わつたなら帰っていいですか
？」

（誰か、助けて。隊長、今助けてくれるなら、仕事しますよー！）

ふむ。なら帰路につき

杏里の家の前まで来た時にな

杏里が突然、私の耳元に唇を近づけ

「ストップ！ーもーいいです！ーもーけっこーです！ー」
む？そうか、残念だ

それでは、私たちも仕事に戻るとしよう

（助かった。碎蜂隊長じゃなきゃ、絶対逃げれないわよ）
？ 随分と嬉しそうに見えるな
まあいい。意外に時間を食ったし、急いで戻るとしよう

杏里君、教鞭編 ？ 可愛いなあ（後書き）

次は、杏里君の杏里君による卒業試験

杏里君、教鞭編　？　卒業考查ですよ、全員集合（前書き）

焦った

久しぶりに書こうと思ったたらネタが出なかった

最近あったこと

5？太った

杏里君、教鞭編　？　卒業考査ですよ、全員集合

杏里 side

「さてさて、卒業試験の内容・・・・・・・・・・。どうですかねえ」
いつそのこと十一番隊の何名かを呼んで勝ち抜きでもさせますか？
でも、手加減しませんしねえ

いや、むしろ

骨でも折ってもらった方が・・・・・・・・

いやいや、それなら虚でも呼んだ方が・・・・・・・・

そうですね！十二番隊に虚を作ってもらえばいいんです
非殺傷モードで

いや、実習でそれはやるはずですし

うーむ

どうでしょうかね

「・・・・・・・・・・。そうだ！俺の斬魂刀を使って・・・・・・・・・・
死人が出ますねえ」
それか、狂人

いや、手加減して時間制限をかければ

1分は長いですかねえ
うん。30秒くらいでしてみましようか

それでは、早速許可を取りに行きますか

・・・・・・総隊長のところでもいいんですかね？

side out

阿散井side

吉良と一緒に飯を食った時の話だ

「そろそろ、卒業考査だね」

吉良、嫌なことを思い出させやがって

「そんなに嫌そうな顔をしないでくれないか。今回は実技中心だから、阿散井君は大丈夫だろ？」

「そうか？座学はボロボロの自信があるぞ。後、鬼道」

「本当に鬼道苦手だよね、阿散井君は」
ほっとけ

「まあ、今回の試験は西東先生も本気みたいだからって、阿散井君？」

何だ、吉良？

「いや、凄い顔してたからね。全く何が気に入らないのかは聞かないけどさ」

そんなに凄い顔してたか？

顔の表面を手で撫でながら

「ほっとけ。なんか気に喰わねえんだ」

「まあいいけど。それじゃあ、準備を忘れないようにね」
そう言つて、吉良は席を立ち出て行った

さて、やってやるうじゃねえか

side out

杏里 side

「さて、皆さん。今日が何の日か知っていますね」

まあ、試験当日ですが

いやー、俺のテストについての予測面白かったですよ

隊長格呼んで来ての実戦演習とか、11番隊呼んで院生フルボッコとか

虚召喚して殺し合いとか、12番隊が持ってきた薬の投薬実験とか

……俺、嫌われてるんでしょうか？

まあいいでしょう

『腰に下げてる刀について聞いても？』

「俺の斬魂刀の響華です」

うわあ、嫌そうな顔しますね。皆さん

『因みに能力は？』

そんなに怯えないで下さいよ

嬉しくなるじゃないですか

「それを教えたら、テストになりませんからね。精々、怯えて下さい」

『試験内容はどの様なものか聞いても良いか、西東？』

勿論ですよ、朽木さん

「これから、皆さんに行くことは他の院生に喋らないで下さいね。喋られると非常にマズイので」

狂華の能力って、知っててやると死ぬほどキツイでしょうしそれに試験内容バラされたら、困りますし

「試験内容は、俺がこの刀を解放してから30秒間耐えることです」
「おー、いい感じにテンパってますねー」

『ど、どのような能力か伺っても？』

「それを言っただけテストになりません」

「それでは、始めますよ。『狂え 響華』」

刀を鞘から抜き、真っ直ぐに院生に構え解号を呟く

side out

朽木ルキア side

杏里が、斬魂刀を構え何かを呟いた瞬間に私の耳に何かの甲高い音が響いてきた

何となく余り聞いていたくない音だ

・・・・・・ルキア

兄様の声！？

『これって、悲鳴！？』

「ああ、気付きましたか。響華の能力は、貴方方の近しい人の悲鳴を聞かせ続けることです。因みに後、20秒ですよ」

えげつない能力だ

次は恋次か

気が狂いそうだ

side out

杏里 side

ふむ、意外と皆さんモチますねえ

15秒くらいで全滅するかと思っただんですが

さて、そろそろ30秒ですね

主よ。私の能力^{チカラ}をもっと使っていただけないでしょうか？

うーん、本気でやってもいいんですがねえ

まあ、後5秒です

5 4 3 2

「さて、皆さん。お疲れ様でした」

響華を鞘に戻し、院生たちを眺める
ふむ。呆けてますねえ

うーん

「全員合格ですか、面白くありませんね」
もう少し本気でやっても良かったですねえ？

「それでは、皆さん。お疲れ様でした。試験は終了です」
さて、お仕事お仕事

s i d e o u t

朽木ルキア s i d e

「やっと終わった」
地獄だった

『・・・・・・・・卒業式に西東呼んでヤラねえ？』

『いや、不意打ちも効かんのに。・・・・そうか！画を使えば』

『勝手にやってなさい。私ら諦めたわ』

正しい選択だと思うぞ

西東はそんなに恨まれる様な授業したかな？

精々、動けなくなるまでド突き倒したくらいだろう

・・・・・・ああ。だからか

「朽木さんは、これからどうする？」

「ん、西東の話なら私は遠慮するが」

「いや、そっちじゃなくて
ん？」

「いや、西東先生のは終わったけど他の試験も残ってるから、どう
するのかなーと」

ああ、そういうことが

「これから、図書館にでも籠ると思うが」

「流石は、朽木さんね。あんなことがあった後でも冷静とは
いや、確かにきつかったが

「そんなにシヨックはないだろう？」

何故か、そんなにシヨックはないし

「うーん？確かに言われてみれば、そうかなあ？」

首を傾げ、こちらを見詰めてくる

「そうだと思うぞ。少なくとも私はそうだ」
それよりも

「明日の試験の準備をしなくていいのか？」

「んー、もう少し休憩してからにするよ」
そうか

うん。明日も頑張るか

side out

杏里 side

「さてさて、要さんでしたか。左陣さんもあたりますかね」
先ずは、左陣さんから

「なんや、西東か。何しに来たんや」

鉄左衛門さんも相変わらずですねえ

「久しぶりですね。左陣さんはいますか？」

「何や隊長に用かい。隊首室におるで」
有難うございます

さてさて、どんな反応をしますかねえ

「失礼します」

一言断って、扉を開ける

綺麗な部屋ですね

書類もたまつてませんし

そして、相変わらず虚無僧の被るアレ

「西東か、何の用だ？」

んー相変わらずの渋い声ですね
いつか生で聞きたいと思います

「今日は質問がありましたね」

「ふむ？珍しいな。そこにかけるといい」
有難う御座います

「さて、何を聞きたい？」

まあ、回りくどいのは嫌ですし

「左陣さん。貴方にとっての正義とはなんですか？」
真っ直ぐに左陣さんの目があるであろう部分を見る
「私にとっての正義は、元柳斎殿の目指す先にある」
ほう？

元柳斎さんの目指す先ですか
どんな正義かは、気になりますが
その内分かりますか

さて、流石に白ですね

味方を増やしている可能性も考えたんですがねえ

「そうですね。有難うございました。質問はこれだけなので、失礼

します」

席を立ち、出口に向かう

「西東、私からも一つ聞いて良いか？」
後から声をかけられる

「どうぞ」

振り向き、左陣さんに向き直る

「西東が目指す正義とはなんだ？」
うーん。左陣さんの目が恐いですねえ

「そうですね。俺の正義は、今の様な生活を守ることですかねえ？」
そんな大仰な目的なんてありませんし
「どういうことだ？」

「ようは、俺が仕事したり、碎蜂さんと遊んだり、春水さんと十四郎さんと酒を飲んだり出来る空間の確保です」

「成程。そのような正義もあるのか」
いや、俺のは正義という程のものではないですよ

「ふむ。西東、参考になった」
いえいえ

それでは、俺は帰らせてもらいますよ

「今度、隊長たち集めて酒でも飲みたいですね」

「私は遠慮させてもらおう」
おや、それは残念

まあ、何となく声も柔らかくなった気がするのでもいいでしょう

「それでは、またいつか」

「ああ。またな」

side out

市丸 ギン side

「なあ、ちよつと行ってくるわ」

「隊長、仕事はまだ残ってますよ」

「気のせいや」

「藍染隊長。今、ちよつとええですか？」

「ん。構わないよ」

「それじゃあ、さつさと本題に入らせてもらいます」

「西東君のことかい？」

「ええ。やっと動き出したみたいですね」

「ああ、これで潰せる」

おお、恐い恐い

西東はんも可哀そうに

でも、頭突っ込んできたんはそっちやで
死んでも恨まんというや

杏里君、教鞭編　？　卒業考查ですよ、全員集合（後書き）

後、一話か二話書いて本編です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6338m/>

目指せ！死神！BLEACH異端編

2011年10月7日22時25分発行